

二葉亭四迷の一生

内田魯庵

青空文庫

二葉亭ふたばていの歿後ぼつご、坪内つぼうち、西本両氏はかと謀はかつて故人の語学校時代の友人及び故人と多少の交誼こうぎある文壇諸名家の追憶または感想を乞こい、集めて一冊として故人の遺靈に手たに向けた。その折諸君のまぢまぢの憶おもいで出を補うために故人の一生の輪廓を描いて巻後に附載したが、草卒の際序述しばしば先後し、かつ故人を追懐する感慨に失して無用の冗句を累かさね、故人の肖像のデッサンとして頗すこぶる不十分であつた。即ち煩冗を去り補修を施せこし、かつ更に若干の遺漏を書足かきたして再び爰こゝに収録するは二葉亭四迷しゆいの如何いかなる人であるかを世に紹介するためであつて、肖像画家としての私の技術を示すためではない。かつ私が二葉亭と最も深く往来交互したのは『浮雲うきぐも』発行後数年を過ぎた官報局時代であつて幼時及び青年期を知らず、更に加うるに晩年期には互いに俗事に累わざらわされて往来漸ようやうく疎うとく、臂ひじを把とつて深く語るの機会を多く持たなかつたから、二葉亭の親友の一人ではあるが、そのボスウエルとなるには最も親密に交際した期間が限られていた。

かつこの一篇は初めからデッサンのつもりで書いたゆえ、如何に改竄かいざん補修を加えどもデッサンは終つひにデッサンたるを免がれない。勿論もちろん二葉亭の文学や事業を批評し

たのではなく、いわば履歴書に註釈加えたに過ぎないので、平板なる記実にもし幾分たりとも故人の人物を想到せしむるを得たならこの一篇の目的は達せられている。更に進んで故人の肉を描き血を流動せしめて全人格を躍動せしめようとするには勢い内面生活の細事にまでも深く突入しなければならぬから、生前の知友としてはかえって能くしがたい私情がある。故人の瑜瑕ゆか並び蔽おほわざる全的生活は他日再び伝うる機会があるかも知れないが、今日はマダその時機でない。かつ自おのずから別に伝うる人があろう。本篇はただ僅わずかに故人の一生の輪廓を彷彿ほうふつせしむるためのデッサンたるに過ぎないのである。下記は大正四年八月の旧稿を改竄補修をしたもので、全く新たに書直し、あるいは書足した箇所もあるが、大体は惣すべて旧稿に由よる。

一 生いたちから青年まで

二葉亭が明治二十二年頃自ら手録した生いたちの記がある。未完成の断片であるが、その幼時を知るにはこれに如しくものはなからう。曰いわく、

余は元治元年二月二十八日を以もつて江戸市いちがやヶ谷かっぱざか合羽坂あひはざか尾州分邸びしゅうに生れたり。父に

ておはせし人はその頃年三十を越え給はず、また母にておはせし人もなほ若かりしかば、さのみは愛し給ひしとも聞かざれど、祖母なる人のいとめでいつくしみ給ひて、父の叱り給ふ時は機嫌よろしからぬほどなれば、おのづから氣随におひたてり。されど小児の時余の尤もおそれたるは父と家に蔵する鍾馗しょうきの画像なりしとぞ。

幼なかりしころより叨りみだに他人に親したしまず、いはゆる人みしりをせしが、親しくゆきかよへる人などにはいと打解けてませたる世辞などいひしと叔母おばなる人常にの給ひき。

六歳のころ父なる人自ら手本をものして取らし給ひつ。されど習字よりは画を好みて、夜は常に木偶でくの形など書き散らして楽みしが、ただみづから画くのみならで、絵巻物（註、錦絵の事なり）など殊ことの外よろこびて常に玩あそべりとか。

画の外余の尤もつとも好みしは昔物語りにて、夜に入ればいつも祖母なる人の袖引きゆるがして舌切したきりすずめ雀すずめのはなしし玉へとせがみしといふ。

されどこれらは幼き時のことなれば今は覚えなし。ただ祖母なる人の物語り給ひしを記せるのみなり。

上野戦争後諸藩引払ひの時余の一家は皆尾州へおもむきたれど、ただ父なる人のみはなほ留とどまりて江戸の邸を守り給へり。

尾州に到りてのちに初めて学に就けり。組外れに漢学塾ありたりしが、その門に入りて漢学を修めり。また余の叔父なる人にも就きて素読を修めり。藩に学あり、英仏両語を教授す。余またこれに入りて仏語を修めり。

余は常に学校に行くを樂みとせしが、学問するが面白きにはあらで、学校にて衆童と遊戯嬉笑するが面白きゆゑなりき。

余のすめる近傍の兒童は皆余の朋友なりき。但し何人も経験したる事ならんが、余の朋友中年たけたるもの二人ありたり。件の二人相親しむ時は余らは皆その麾下に属してさまざまなる悪戯をして戯れしが兩人仲違ひしたる時は余らもまた仲間割れをせり。余は到つて臆病なりしかばかかる時は常に兩人中余の尤も懼るる方に附き随ひて媚を獻じてその機嫌を取れり。

余はかくの如く他人に対して臆病なりしかど、家人に対して大胆にていはゆる灣泊を極めたりき。余は甚だしき疝性にて毎朝衣服を母なる人に着せてもらひしが、常に一度にては済まず、何処か氣持悪しければ二、三度も着かへるを常とせるをもて、これに由りて母なる人を苦めたる事もありき。

概していへば当時の余の心状は卑劣なりしなり。

以上はその全文である。取出でていうほどの奇はないが、二葉亭の一生を貫徹した潔癖、俗にいう氣難かし屋の氣象と天才肌の「シャイ」、俗にいう羞恥み屋の面影が児供の時から仄見えておる。かつこの自伝の断片は明治二十二年ごろの手記であるが、自ら「当時の余の心状は卑劣なりしなり」と明らかに書く処に二葉亭の一生鞭撻してやまなかつた心の艱みが見えておる。

尾州から父に伴われて父の任地島根に行き、殆んど幼時の大部分を島根に暮した。その頃の父の同僚であつて、叔姪、同様に親しくした鈴木老人その他の話に由ると、頗る持余しの茶目であつたそうだ。軍人志願で、陸軍大将を終生の希望とし、乱暴して放屁するを豪いように思つていたと、二葉亭自身の口から聞いた。

二葉亭の伯父で今なお名古屋に健在する後藤老人は西南の役に招集されて、後に内相として辣腕を揮つた大浦兼武（当時軍曹）の配下となつて戦つた人だが、西郷勲負の二葉亭はこの伯父さんが官軍だというのが氣に喰わないで、度々伯父さんを捉まえては大議論をしたそうだ。二葉亭の東方問題の抱負は西郷の征韓論あたりから胚胎したらしい。こんな塩梅に児供の時分から少し變つていたので、二葉亭を可愛がつていた祖母さんは「この子は金鍰指すか薦被るかだ、」と能く人に語つたそうだ。（金鍰指すか薦

被るかというは大名となるか乞丐こじきとなるかという意味の名古屋附近に行われる諺。)

十五歳の時、島根から上京して四谷の忍原横町おしはらよこちようの親戚しんせきの家に寄食した。その時分もヤンチャン小僧で、竹馬の友たる山田美妙びみようの追懐談に由ると、お神楽かぐらの馬鹿踊ばかおどりが頗る得意であつて、児供同士が集まると直ぐトツピキピを初めてヤンヤといわせたそうだ。間もなく芝の愛宕下あたごしたの高谷塾たかたにに入塾した。高谷塾というは『日本全史』というかなり浩こ瀚うかんな大著述をしたその頃のひと癖ある漢学者高谷龍洲の家塾であつて、かなり多数の書生を集めて東京の重なる私塾の一つに数えられていた。大阪朝日の旧社員しんかの土屋大作や、今は故人となつた帝劇の座付作者の右田寅彦みぎたのぶひこ兄弟も同塾であつたそうだ。然るにイタズラ小僧の茶目の二葉亭は高谷塾に入塾すると不思議にわかに俄に打つて變つた謹直家となつて真面目じめに勉強するようになった。知らない顔の他人の中へ突き出されて、持前もちまえの羞恥はにかみ屋から小さくなつたのであろうが、一つは今なら中学程度に当る東京の私塾の書生となつたので、俄に豪くなつて大人おとなびたのでもあろう。

その時代、一番親しくしたのは二葉亭の易簣えきさいく当時暹羅公使シヤムをしていた西源四郎と陸軍大尉で早世した永見松太郎の二人であつた。殊に永見は同時に上京した同郷人であるし、同じ軍人志願であつたからなお更深く交際した。然るに永見は首尾よく陸軍の試験に合格し

たが、二葉亭はその頃からの強度の近視眼のため不合格となった。（永見はその後参謀部の有数な秀才と歌われていたが、惜しい事に大尉で若死にしまった。福島大将と同時代であつたそうだ。）二葉亭は運悪く最初の首途かじでに失やりそこ敗そなつてしまつたが、首尾よく合格して軍人となつてもけんかいふき狷介不羈の性質わづらいが累つらをなして到底長く軍閥に寄食していられなかつたろう。

その頃二葉亭は既に東亜の形勢を觀望して遠大の志を立て、他日の極東の風雲を予期して舞台の役者の一人となろうとしていた。陸軍を志願したのも、幼時は左ひだりに右みぎくその頃では最早もはやただ軍服が着たいというような幼い希望ではなかつた。それ故に軍人志望が空むなしくなると同時に外交官を志ざして旧外国語学校の露語科に入学した。その頃高谷塾以来の莫ば逆くげきたる西源四郎も同じ語学校の支那語科に在籍していたので、西は当時の露語科の教師古川常一郎の義弟であつたからなお更ますます益々交誼を厚くした。その後間もなく西が外務の留学生となつて渡支してからも山海数千里を距へだてて二人は片かた時ときも往復の書信を絶やさなかつた。その頃の二葉亭の同窓から聞くと、暇ひまさえあると西へ遣やる手紙を書いていたそうで、その手紙がイツデモ国際問題に関する侃々かんかん諤がく々の大議論で、折々は得意になつて友人に読んで聞かせたそうだ。二葉亭の露ロシア西語は日露の衝突を予想しての国家存亡

の場合に活躍するための準備として修められたのだから、「君は支那公使となれ、我は露国公使とならん」というが二人の青年の燃ゆる如き抱負で、殆んど天下の英雄は使君と操とのみの意気込であつた。二葉亭が死ぬまでも国際問題を口にしたのは決して偶然ではないので、マダ二十歳になるかならぬかの青年時代から血を湧かした希望であつたのだ。

（二葉亭の歿後、或人が西を訪問してその頃の二葉亭の遺事を聞きたいといったところが、西は頗る冷然として二葉亭とはホンの同窓というだけの通り一遍の浅い関係だからその頃の事は大抵忘れてしまったといういたつて率気ない挨拶だつたそう。御当人がそういう健忘性だから世間からも西という公使があつたかなかつたか今では全く忘れられている。）

明治十八年の秋、旧外国語学校が閉鎖され、一ツ橋の校舎には東京商業学校が木挽町から引越して来て、仏独語科の学生は高等中学校に、露清韓語科は商業学校に編入される事になった。当時の東京商業学校というは本と商法講習所と称し、主として商家の子弟を収容した今の乙種商業学校程度の頗る低級な学校だつたから、士族気質のマダ失せない大多数の語学校学生は突然の廃校命令に不平を勃発して、何の丁稚学校がという勢いで商業学校側を睥睨した。今ならこんな専制的命令が行われるはずもなく、そういう場合学

生は聯合して示威運動でもする処だが、当時の学生は尚だそういう政治運動をする考がなく、硬骨連が各自に思い思いに退校届を学校へ叩きつけて飛出してしまった。二葉亭もまたその一人で、一時は商業学校に学籍を転じたが、翌十九年一月、とうとう辛抱が仕切れないで怫然袂を払って退学してしまった。最う二、三月辛抱すれば卒業出来るのだし、二葉亭は同学中の秀才だったから、そのまま欠席して試験を受けないでも免状を与えようという校長の内諭もあつたが、気に喰わない学校の卒業証書を恩惠的に貰う必要はないと、キビキビ跳付けてパイと退学してしまった。

が、この頓挫が二葉亭の生涯の行程をこじらす基いとなつたは争われぬ。当時の商業学校の校長矢野次郎は二葉亭の才能を惜んで度々校長室に招いて慰諭し、いよいよ学校を退学してからも身分上の心配をしてやろうとまで厚意を持ってくれた。が、不平で学校を飛出しながら校長の恩に絶るような所為は餓死しても二葉亭には出来なかつた。かつ露語科に入った当初の志望こそ外交官であつたが、語学の研究のため露西亜文学を涉猟し初してから何時の間にか露国思想の感化を受けると同時に、それまで潜在していた文学的興味、芸術的意識が俄に頭を擡上げて来て当初の外交官熱が次第に冷め、その時分は最早以前の東方策士形気でなくなつていたから、矢野の厚意に絶つて官界なり実業界なりに飛込

む気にはなれなかつた。元來が軍人志願の漢学仕込で、岳武穆や陸宣公に鍛えられていた上に、ヘルチエンやビエリンスキーの自由思想に傾倒して意氣鬱勃としていたから、一から十までが干渉好きの親分肌の矢野次郎の実業一天張の方針と相容れるはずはなかつた。算盤玉から弾き出したら矢野のいう通りに温和しくなつての方が得策であつたかも知れないが、矢野が世話を焼けば焼くほど、世話になるが利益と思えば思うほど益々反抗して、折角の矢野の厚意をピタリと跳付けて後足で蹴つてしまつた。無論、学校を飛出してから何をするという恃はなかつたが、この場合は是非分別を考ふる違もなくて、一箇に血氣に任して意地を貫いてしまつた。

二 春廼舎との握手

あたかもその頃であつた。坪内逍遙の処女作『書生氣質』が発行されて文学士春廼舎籠の名が俄に隆々として高くなつたのは。（『書生氣質』は初め清朝四号刷の半紙十二、三枚ほどの小冊として神田明神下の晚青堂という書肆から隔週一冊ずつ続刊されたので、第一冊の発行は明治十八年八月二十四日であつた。）丁度政治が数年後の国会開

設を公約されて休息期に入つて民心が文学に傾き、リットンやスコットの翻譯小説が続出して歓迎され、政治家の創作が頻りに流行して新らしい機運に向いていた時であつたから、今の博士よりも遙にヨリ以上重視された文学士の肩書を署した春廼舎の新作は忍ち空前の人氣を沸騰し、堂々たる文学士が指を小説に染めたという事は従来戯作視した小説の文学的位置を重くもし、世間の好奇心を一層喚びもした。その頃までは青年の青雲の希望は政治に限られ、下宿屋から直ちに参議となつて太政官に乗込もうというのが青年の理想であつた時代であつたから、天下の最高学府の出身者が春廼舎隴という粹な雅号で戯作の真似をするというは弁護士の娘が女優になつたり、華族の冷飯がキネマの興行師となるよりも一層意外で、『書生氣質』が天下を騒がしたのはその芸術的効果よりも実は文学士の肩書の威力であつた。

それ故世間は半信半疑で、初めはやはり政治家の小説と同じ一時の流行カブレで、堂々たる学士がマジメに小説家にならうとは誰も思わなかつた。ところが高田半峰が長々しい批評を書き、春廼舎もまた矢継早に『小説神髓』（この頃『書生氣質』と『小説神髓』とドツチが先きだろうという疑問が若い読書子間にあるらしいが、『神髓』はタシカ早稲田の機関誌の『中央學術雜誌』に初め連載されたのが後に単行本となつたので、『書生氣

質』以後であつた。）から続いて『妹と背鏡』を發表し、スモレット、フィールディング、ドイツケンス、サツカレー等の英国小説家が大家豪として紹介され、戯作の低位から小説が一足飛びに文明に寄与する重大要素、堂々たる学者の使命としても恥かしくない立派な事業に跳上つてしまつた。それまで政治以外に青雲の道がないように思つていた天下の青年はこの新らしい世界を發見し、俄に目覺めたように翕然として皆文学に奔つた。美妙や紅葉が文学を以て生命とする志を立てたのも、動機は春廼舎の成功に衝動されたのだ。

二葉亭はこれより先き語学校の科目としてゴンチャロフやゴゴリやレルモントフやドストエフスキー等の大文学を研究し、進んでビエリンスキー、ドブロリユーボフ、ヘルチエン等の論文集を耽読し、殊に深くビエリンスキーに傾倒していた。尤も半ば語学研究の必要のために外ならなかつたが、当時の語学校の教師グレーといふがなかなか文学家であつて、その露文学を講ずるや微に入り細に涉つて批評し、かつエロキユーシヨンに極めて巧妙で、身振声色交りに手を振り足を動かし眼を剥き首を掉つてゴンチャロフやドストエフスキーを朗読して聞かしたのが作中のシーンを眼前に彷彿せしめて、一卜度グレーの講義を聞くものは皆語学の範圍を超えてその芸術的妙趣を感得し、露西亞文学の

熱心なる信者とならずにはいられなかつた。二葉亭もまたこの一種の天才ある教師の指導を受けて何時いつとはなしに芸術的興味を長じ、進んで専門文人となるまでの断乎だんこたる決心は少しもなかつたが、知らず識しらずに偶然文人の素地を作つていた。時も時、学校を罷やめて何をするという方角もなく、満腔まんこうの不平を抱いて放浪していた時、卒然としてこの文学勃興の機運に際会したは全く何かの因縁であつたらう。

当時の春廼舎臚の声望は旭きよくじつ日昇天の勢いで、世間の『書生氣質』を感歎するやあたかも凱旋がいせん將軍を迎うる如くであつた。が、世間が驚嘆したのは実は威力ある肩書のためであつて、その実質は生残りの戯作者流に比べて多少の新味はあつても決して余り多く価値するに足らなかつたのは少しく鑑賞眼あるものは皆認めた。ましてや偉大なる露国文学の一とわたりを究きわめた二葉亭が何条肩書に嚇おどかされよう。世間が『書生氣質』や『妹と背鏡』や『小説神髓』を感嘆する幼稚さを呆あきれると同時に、文学上の野心が俄にムズムズして来た。尤も進んで春廼舎と競争しようというほど燃上つたのではなかつたが、左ひだりに右みぎく春廼舎の技巧や思想の鹵癢はがゆさに堪えられなくなつた結果が『小説神髓』の疑問の箇処々々に不審紙を貼はつたのを携えて突然春廼舎の門を叩いた。語学校を罷やめてから間もなくであつた。

二葉亭が春廼舎を訪問したのは、昔の武者修行が道場破りをするツモリで他流試合を申込むと多少似通った意気込がないではなかった。が、二葉亭は極めて狷介な負け嫌いであると同時にまた極めて謙遜けんそんであつて、如何いかなる人に対しても必ず先ず謙虚おしえして教を待つおろその礼を疎かにしなかつた。春廼舎を慊あきたらなく思つていたには違ひないが、訪問したのは先輩を折しやくぶく伏ふくして快を取るよりは疑問を晴らして益うを享うくるツモリであつたのだ。が、ピエリンスキーに傾倒しゴンチャロフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー等に飽満した二葉亭が『書生氣質』の著者たる当時の春廼舎に教えられる事が余り多くなかつたのは明あきらかに想像し得られる。

が、それ以後しばしば往来して文学上の思想を交換すると共に文壇の野心を鼓インスパヤ吹キヤされた事は決して尋常ひんとおりでなかつた。矢崎鎮四郎やざきしんしろうを春廼舎に紹介したのもやはり二葉亭であつた。矢崎は明治十九年の十月には処女作『守銭奴の肚しゆせんどの はら』を公けにし、続いて同じ年の暮れに『ひとよぎり』を出版し、二葉亭に先んじて逸いちはや早く嵯峨さがの屋やお室むろの文名を成した。

二葉亭の初めての試みはゴーゴリの翻訳であつた。が、世間には発表しなかつた。その発表しなかつた理由は不明であるが、多分性来の自尊心が軽々しく公けにするを欲しなかつた。

つたのであろう。その時分またビエリンスキーの美論の一部を翻譯した事があつた。尤もこの翻譯は春廼舎を初めビエリンスキーを知らない友人に示すためであつて、公けにするツモリはなかつたのであるが、その中の一部分が翻譯後暫らく経つてから冷々亭主人の名で前記した早稲田わせだの機関誌の『中央學術雜誌』に掲載された。が、ビエリンスキーの美論は当時の讀書界には少し高尚過ぎたから、誰にも碌々ろくろく読まれず、殆んど注意されずに終つたが、今から三十年前にこういう深邃しんすいな美学論が翻譯されたというは恐らく今の若い人たちの思掛けない事であらう。その時分二葉亭は冷々亭杏雨きょうう、率性堂、または翕々亭しゅうしゅうと称していた。

その頃二葉亭は学校を罷めてしまつて、これから先きどうでも一本立ちにならねばならない場合であつた。親代々家祿で衣食した士族出での官吏の家では官吏を最上の階級とし、官吏と名が附けば腰弁こしべんでも一廉いつかどの身分があるように思つていたから、両親初め周囲のものは皆二葉亭の仕官を希望していた。が、二葉亭は決然袂を揮つて退学した余勇がなお勃々としていた処へ、春廼舎からは盛んに文学を煽り立てられ、弟分おととぶんに等しい矢崎ですらが忽ち文名を揚ぐるを見ては食指動くの感に堪えないで、周囲の仕官の希望を無視して、砂を嚙かんでも文学をやると意気込んでいた。その時分の文学的霸心はしんは殆んど天に冲ちゆうす

る勢いであつた。

三 『浮雲』及びその時代の生活

『浮雲』の第一編が発行されたは明治二十年七月であつた。この第一編は今も昔も変らぬ書肆の商略から表紙タイトルページにも扉にも春廻舎臚著と署して二葉亭の名は序文に見えるだけだから、世間は春廻舎をのみ嘖々さくさくして二葉亭の存在を少しも認めなかつた。二葉亭の名が一般読書人に知られて来たは公然その名を署した第二編の発行以後である。が、それすら世間は春廻舎の別号あるいは傀儡かいらいである如く信じて二葉亭の存在を認めるものは殆んど稀まれであつた。

尤も第一編は春廻舎の加筆がかなり多かつたから多分の春廻舎臭味があつた。世間が二葉亭を無視して春廻舎の影法師と早呑はやのみこ込みしたのも万まんざら更無理ではなかつた。が、誰でも処女作を発表する時は臆病で、著作の経験上一日の長ある先輩の教えを聞くは珍らしくない。ましてや謙遜な二葉亭は文章の造詣ぞうけいでは遙に春廻舎に及ばないのを認めていたから、己おのれを空むなしうして春廻舎の加筆を仰いだ。春廻舎臭くなつたのも止むを得なかつた。が、

一端発表して後は自信を強くし、第二編には思う存分に大胆な言文一致を試みて自個の天地を開き、具眼の読書子をして初めて春廼舎以外に二葉亭あるを承認せしめた。

言文一致の創始者としては山田美妙が多年名譽を独占し、今では美妙と言文一致とは離るべからざるものの如く思われておる。が、美妙の『夏木立』は明治二十一年八月の出版で、『浮雲』第一編よりは一年遅れてる。尤も『夏木立』中の「武蔵野」は初め『読売新聞』に載つたのであるが、やはり『浮雲』の方が先んじていた。あるいは『浮雲』第一編は嚴密な意味の言文一致でないという人があるかも知れぬが、「武蔵野」もまた頗る雅文臭いもので、時代の先後をいつたら二葉亭の方が当然その試みに率先した名譽を荷うべきはずである。不思議な事には美妙と二葉亭とは親たちが同じ役所の同僚であつて、児供の時から朋友であつた。尤も竹馬の友というだけで、中ごろは交際が絶え、相談したので申合わしたのでもなかつたが、相期せずして幼友達おさなともたち同士どうしのこの二人が言文一致体を創はじめたというは頗る不思議な因縁であつた。尤もこれより以前、漢字廃止を高調した仮名の会の創立当時から言文一致は識者の間に主張され、極めて簡単な記事文や論説を言文一致で試みた者もあつた。同時にこれより三、四年前に発明された速記術がその頃漸く實際に応用されて若林珮藏かんぞうの速記した円朝えんちようの『牡丹燈籠』が出版されて活きた口話の

実例を示したのが俄に言文一致の機運を早めたのは争えない。美妙も二葉亭もこの円朝の口話の速記に負う処が多かつたのは想像するに余りがある。明治の文章史を作る者は円朝の『牡丹燈籠』と速記者若林珮蔵の功労とを無視する事は出来ない。

かつまた美妙と二葉亭との文体は等しく言文一致であつても著るしい語系の差異がある。美妙は本^もとが韻文家であつて韻語に長じ、兼ねて戯文の才があつたから、それだけ従来^の国文型が抜け切れない処があつた。二葉亭も院^{いんぼん}本や小説に沈潜して好んで馬琴^{ばきん}や近松^{ちかまつ}の真似をしたが、根が漢学育ちで国文よりはむしろ漢文を喜び、かつ深く露西亜文^{しやし}に親んでいたから、容易に国文の因襲を脱して思切つて大胆なる言文一致を試みる事が出来た。春廼舎の加筆した『浮雲』第一編は別として、第二編となると全然従来^の文章型を無視した全く新しい文体を創^{はじ}めた。二葉亭の直話に由^よると、いよいよ行^{ゆきづま}話^わつて筆が動かなくなる^と露文で書いてから翻譯したそう^だ。二葉亭の露文は学生時代からグレエ教師が感嘆したという位で、後にダンチエンコが来朝して能見物に案内した時、ダン君に示すための当日の能の筋書を前夜^{うち}中に露訳したというほどの腕達者だから、露文で書いて邦訳した^{といふ}のも強^{あなが}ち英雄人を欺^{あざむ}くの放言^{はなげ}だとは思^{おも}われ^{ない}。ゴンチャロフの真似^{まね}をして出来^{でき}損^{そと}なつたとは二葉亭が能^よく人に話した謙遜^{けんそん}のような自得^{じとく}のような追懐^{しゆい}であつた。『浮雲』

の文章に往々多少の露ろしゅう臭くさがあるのはこれがためであろうが、そこが在来の文章型を破つた独創の貴とさである。美妙のは花やかにコツテリして故わざとらしい厭味いやみのある欧文の模倣なまに充ちていた。丁度油をコテコテ塗なすつて鬢かつらのように美しく結ゆい上げた束髪そくはつが如何にも日本臭いと同様の臭味があつた。二葉亭のは根本から欧文に醇じゆん化かされ、極めて楽に日常用語を消化して全く文章離れがしていたが、美妙のはマダ在来の文章型を脱し切れない未成品であつた。美妙の功勞を十分認めるとしても、また創始者たる名譽は二人の中のドツチとも定められないとしても、今日の言文一致の宗とするは美妙よりはむしろ二葉亭である。

さてこの『浮雲』の構案であるが、一体この構案を何処どこから得て来たかは不明である。

二葉亭は自分の性格の一部を極端に誇張したもの（即ち文三）を中心として両親や周囲の人物の性格を同じく極端に延長したものを配して新旧思想の衝突を描いたのであると、極めて漠然ばくぜんたる話をした事があつた。大雑駁おおよっぱに言えばツルゲーネフ等に倣ならつて時代の葛藤かつとうを描こうとしたのは争われないが、多少なりともこれに類した事実が作者の視聽内にあつた乎か否乎は二葉亭はかつて明言しなかつた。ただその頃の作家は自分の体験をありのままに書き周囲の人物をモデルとするような事は余り倣しなかつたから、『浮雲』のモデルや事實は先ずなかつたらうと信ずる。

二葉亭から直接聞いた咄はなしに、二葉亭の家の直ぐ近所にA・Nというその頃若い書生間に評判な新らしい女が住んでいたが、強していえばこの女が『浮雲』のお勢のモデルであったそうだ。女学生ではあるが学校へは行かないで弟と二人で世帯を持って、国から送る学費で氣随きまま氣儘きままに暮まっていた。少ちつとばかり洋書が読めて多少の新らしい趣味を解し、時偶ときたまは洋服を着る当時の新らしい女で、男とばかり交際していた。その頃は今より一層はなは甚はなだしい欧化熱の頂上に登り詰めた時代であつて、青年男女の交際が盛んに鼓舞され、本郷ほんごう神田辺の学生間に□□会、△△俱樂部クラブなどと称する男女交際を唯一の目的とする、今なら不良扱はねまいされる青年の団体がイクツもあつた。Nはこういう団体の何処へでも顔を出して跳はねま廻わっていたから、御面相は頗る振なかなかつたが若い男の中には顔が売うれていた。当時のチャキチャキの新らしい男たる硯友社けんゆうしゃの中にもこの女と親おしいものがあつたはずである。その上にこの女は弟と二人ぎりの氣随きまま氣儘きままの暮ましをしていて、遠慮きか氣兼かをする者が一人もいなかつたから、若い男は好いい遊あそび場ばにして間断しつきりなしに出入でいりして、毎晩十二時一時ごろまでもキヤツキヤツと騒さわいでいた。小説家となるツモリになつても志士氣質うの失うせな二葉亭は、女と交際するような事は決きしてなかつたが、ツイ眼と鼻の間だから近所の評判となつてこの女の噂うわさを聞きいていたので、いよいよ小説を立案するに方あたつて偶然おもいつ憶おぼ付つ

いたのがこの女であった。そこでこの女をモデルとして当時の新らしい女を描こうとし、この目的のためにしばしばこの女の住居すまいの近所を徘徊はいかいして容子ようすを瞥見べっけんし、或る晩は軒の下きしたに忍んで障子に映る姿を見たり、戸外に洩もれる声を窃ぬすみ聴きいたりして、この女の態度から起居たちいふるまい振舞、口吻こうふんまでをソツクリそのままに写したのがお勢であるようだ。無論外形の一部分をモデルとしたので、全体を描いたのではなかった。第一、この女は随分マズイ御面相で、お勢のような美人でなかった。かつお勢よりもお転婆てんばであり引摺ひきずりであった。その上に御面相の振わないのを自覚せいしていた為せいであろうが、男と交際せうしていてもお勢のよくな *coquetish* な容子は少しもなかった。仮にこの女と本田と取組ましたなら、お勢のように本田の 翫なぶりもの 弄なぶりもの にならないうでかえって本田を翫弄なぶりものにしたかも知れない。恐らくこの女は当時の世評噴々たる『浮雲』を読んだに違ちがいが、自分がお勢のモデルであるとは気が附つかなかつたであろう。お政のぼるにも昇のぼるにもモデルがあるといつて、誰たれそれであろうと揣摩しまする人もあるが、作者自身の口からは絶たえてソナ咄はなを聞きかなかつた。勿論、文三が作者自身の性格の一部を極端に誇張して作つくり上げたのが争まわれないと同様に、作者に近接する人物の性格の一部をモデルとしたに違ちがいなかろうが、二葉亭はお政や昇のぼるについては何にも咄はなさなかつた。

全体として評すれば『浮雲』の文章及び構作は共に未成品たるを免かれない。が、『浮雲』を評するものは今より殆んど四十年前の作、二十四歳の青年の作である事を記憶せねばならない。これより以後多くの文人が続出して、代る代るに文壇を開拓して仏露の自然主義まで漕付こぎつけるにおよそ二十年を費やしている。少くも『浮雲』の作者は二十年、時代に先んじた先駆せんくしや者であるといわねばなるまい。単に文章の一事だけでも、今日行われている小説文体の基礎を築いた功労者であるといわねばなるまい。どの道、春廼舎の『書生氣質』や硯友社連の諸作と比べて『浮雲』が一頭地いっとうちを挺ぬきんずる新興文芸の第一の曙光しやうこうであるは争う事は出来ない。中には文学史上の著名の傑作が時代という考を去るとしげしげ価値が乏しくなる幾多の例から推して、『浮雲』をもまた時代の産物以上の価値がないもののように軽視するものがあるが、外国の名著と比べたらあるいは余り多くを価値する事が出来ないかも知れないが、日本のとなら同時代のものはさて置き、今日嘖々される諸作と比べても決して軒軽けんちする処がない。但し『浮雲』は二葉亭の思想動揺の過程またに跨またがって作られてるから、第一編と第二編と第三編と、各々箇立かんたつして一貫する脈絡を欠いてい。が、各々独立した箇々の作として見ても現代屈指の名作たるを少しも妨げない。強しいて評価すれば、第一編はマダ未熟であり、第三編は脂あぶらが抜けて少しくタルミがあるが、第二

編に到つては全部が緊張していて、一語々々が活き活きと生動しておる。未成品であつても明治の文学史に燦爛さんらんたる頁を作るエポック・メイキングの名著である。

四 『あいびき』及び『めぐりあい』

丁度同時代であつた。徳富蘇峰とくとみそほうは『将来之日本』ひっさを拏ひげて故山から上つて帝都の論壇に突入し、続いて『国民之友』を創刊して文名隆々天下を圧する勢いがあつた。当時の青年は皆その風を望んで蘇峰に傾倒し、『国民之友』は殆んどほと天下の思想界に号令する觀があつた。二葉亭もまた蘇峰が高調した平民主義に共鳴し、臂ひじを把とつて共に語る友と思込んで、辞を低うし礼を尽して蘇峰を往訪した。が、熱烈なる天才肌の二葉亭と冷静なる政治家氣質の蘇峰と相契合するには余りに距離があり過ぎたから、応酬接見数回を重ねた後はイツとなく疎遠となつてしまつた。が、天下の英才を集めて『国民之友』を賑にぎわすのを片時も怠らなかつた蘇峰はこの間に二葉亭のツルゲーネフの翻譯を紙面に紹介して読書界の耳目を聳動しょうどうした。『浮雲』は初め春廼舎の作として迎えられ、二葉亭の名が漸くようや知られて来てからもやはり春廼舎の影武者であるかのように思われていた。二葉亭の存在が初

めて確実に世間に認められたのは『浮雲』よりはむしろ『国民之友』で紹介された翻訳の『あいびき』であった。

その頃の翻訳は皆筋書であった。大体の筋さえ通れば勝手に省略したり刪潤したり、甚だしきは全く原文を離れて梗概を祖述したものであった。かつ翻訳家の多くは邦文の造詣に貧しいただの語学者であったから、翻訳文なるものは大抵ゴツゴツした漢文崩しやあるいは舌足らずの直訳やあるいは半熟の馬琴調であつて、西文の面影を偲ぶに足らないは魯か邦文としてもまた読むに堪えないものばかりだった。この非芸術的濫訳横行の中にあつて、二葉亭の『あいびき』は殆んど原作の一字一句をも等閑にしなない翻訳文の新しい模範を与えた。後年盛んに翻訳し出した頃二葉亭は『あいびき』時代を追懐して、「あの時分はツルゲーネフを崇拜して句々皆神聖視していたから一字一句どころか言語の排列までも原文に違えまいと一語三礼の苦辛をした、あんな馬鹿骨折は最う出来ない、今ならドシドシ直してやる、」と笑つた事があつた。『あいびき』の訳文の価値は人に由て区々の議論があるうが、苦辛慘澹は実に尋常一様でなかつた。

が、余り原文に忠実であり過ぎたため、外国文章の句法辞法に熟する人でなくてはとても理解されない難かしいものとなつた。尤も当時のタワイない低級小説ばかり読んでる読

者に對して一足飛びにツルゲーネフの鑑賞を要求するは豚に真珠を投げるに等しい無謀であつて、大抵な読者は最初の五、六行から消化し切れないうで降参してしまつた。この難解の訳文を平易に評釈して世間に示し、口を極めて原作と訳文との妙味を嘖々さくさく激称したは石橋忍月いしはしにんげつであつた。當時の一般読者が『あいびき』の価値をほぼ了解してツルゲーネフを知り、かつ二葉亭の訳文の妙を確認したは忍月居士こじの批評が与あずかつて大おおに力があつた。

続いて『都之花』の発刊と共に『めぐりあい』が五号に涉つて連載された。『あいびき』に由てツルゲーネフの偉大と二葉亭の訳筆の価値とを確認した読者は崑山こんざんの明珠を迎ふる如くに珍重愛惜し、細つづさに一字一句を翫味研究して盛んに嘖々した。が、普通読者間にはやはり豚に真珠であつて、當時にあつてこの二篇の価値を承認したものは真りに寥々りょうりょう晨星しんせいであつた。が、同時にこの二篇に由て初めて崇高なる文学の意義を了解し、堅実なる新らしい文学の基礎を固め、もしくは感激して新文芸の開拓を志すに至つたものは決して少くなかつた。国木田独歩くにきだどつぽの如きは実にその一人であつて、独歩一派の自然主義運動は実にこの『あいびき』と『めぐりあい』とに発途しておる。短かい翻譯であるが啻ただ翻譯界の新生面を開いたばかりでなくて、新らしい文芸の路を照すの光輝ともなつた。その文壇に与えた効果は『浮雲』よりもかえつて偉大であつたかも知れない。時代の先駆者とし

ての二葉亭の名譽は今から三十余年前にツルゲーネフを翻譯した功績だけでも十分承認しなければなるまい。

五 『浮雲』時代の失意煩悶

『浮雲』著作当時の二葉亭は霸氣鬱勃はきうつぱつぱつとして、僅わずかに春廼舎を友とする外は眼中人なく、文学を以てしては殆んど天下無敵の概があつた。が、一面から見れば得意時代であつたが、その得意というは周囲及び社会を白眼傲睨ごうげいする意気であつて、境遇上の満足でもまた精神上の安心でもまた思想上の矜持きやうぢでもなかつた。

その頃の二葉亭は生活上の必要と文芸的興味の旺盛おうせいと周囲の圧迫に対する反抗とからして文学を一生の生命とする熱火の如き意気込があつた。が、二葉亭の文学というは人生に基礎を置く文学であつて、単なる芸術一天張の享樂主義や遊蕩ゆうとう三昧さんまいや人情趣味の文学ではなかつた。即ちビエリンスキーの文学、ゴンチャロフの文学、ドストエフスキーの文学、ツルゲーネフの文学であつて、京伝きやうでんの文学、春水しゆんすいの文学、三馬さんばの文学ではなかつた。

然るに当時の文壇は文芸革命家をもて他ひとも許し自らも任ずる春廼舎主人の所説ですらが根本の問題に少しも触れていない修辭論であつて、人生問題の如きは全く文学と交渉しないものと思われていた。例えば『浮雲』に対する世評の如き、口を揃そろえて嘖さくさく々称讚したが、渠かれらの称讚は皆見当違いあるいは枝葉末梢まつしようであつて、凡近卑小の材を捉とらえて人生の機微を描こうとした作者の觀照的態度に対して批判を加えた者は殆んど一人もなかつた。尤もこの二葉亭の目的は失敗してはいたが、その失敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは作者自身であつて、世間一般の読者は（文壇の審判官たる批評家でさえも）作者が油汗を流した人生の觀照には全く無関心没交渉であつた。如何に感嘆されても稱讚されても藪やぶ睨にらみの感嘆や色盲的の稱讚では甘受する事が出来ないで、先ず出発の門出かどからして不満足を感じざるを得なかつた。

加しか之のみならず、初めは霸心鬱勃として直ちに西欧大家の墨を衝つこうとする意気込であつたが、いよいよ着手するとなると第一に遭逢したのは文章上の困難であつた。如何に因襲の旧型を根本的に破壊するツモリであつても、日本文で書く以上は日本の在来の文章語や俗談口語の一と通りを究めねばならなかつた。二葉亭は漢学仕込で魏ぎ叔しゆく子や壮悔堂を愛讀し、国文俗文の一と通りにも通じていたが、いよいよ文学を生命とするとなると、それ

までは閑余の漫読に過ぎなかつた群書の涉獵にヨリ一層進んで深く造詣しなければならぬから骨が折れた。然るに二葉亭の志ざす文学は道楽気分の遊戯でなくして真劍命掛けであつたから、如何に文章を研究するためでも、日本の在来の遊戯文章を真面目になつて研究する馬鹿々々しさに堪えられなかつた。二葉亭の当時の日記に、「我れ今まで葉袋もなき小説を油汗にひたりて書き来りしが、これよりは將た如何にすべき、我が筆は誠に稚なし、もしこれよりも小説を書きて世を渡らんとせば先づ文を属する事を習はざるべからず、迷惑がらるるを目をねぶつてこらへ、人の蔵書を借りて読まざるべからず、その書は如何なる類ひかといへば、粹とか通とかいひてこの世を遊び暮せし人々の食はうがため呼吸をしやうがために書散らしたるありても益なくなくとも不自由にもなきつまらぬ書物のみなり、かかる書類に眼を勞らせ肩をはらし命を撈り取られて一世を送るも豈心外ならずや」云々とあるは当時の心事を洩らした述懐であつて、二葉亭はこの文章上の困難に一通りならぬ苦辛をみた。とりわけ自己を批判するに極めて苛酷な人の癖として十目の見る処『浮雲』が文章としてもまた当時の諸作に一頭地を挺んずるにもかかわらず、深く自ら恥じかつ懼れて「自分には小説は書けない、自分は文人たる資格がない」とまで気を腐らせてしまつた。

かつまた二葉亭のためには文学それ自身よりは根本の人生問題の方が重大であった。ツマリ人生のための文学というが、そもそも人生をどうしようというの乎。人生の帰趣とか目的とかいうものが果してあるのさう乎。安心とか信仰とかいうものが果して得られるのさう乎。知識で究めるのは果しが着かないというなら、科学や哲学に何の権威がある乎。科学や哲学で究めても解らないものなら文学や宗教でどうして満足出来る乎。そんな疑問が推究すれば推究するほど後から後から後からと生じて終には文学その物の価値までが危なつかしくなり、ツルゲーネフやドストエフスキーの後光が段々薄くなり出すと、これらの文豪に比べて遙に天分薄い日本の文人亜流——自分もその一人として——の文学三昧は小児の飯事同様の遊戯であつて、人生のための文学などとは片腹痛い心地がして堪えられなかつた。

然るにまた一方には物質上の逼迫がヒシヒシと日に益々加わつて来た。尤もその頃二葉亭はマダ部屋住であつて、一家の事情は二葉亭の自活または扶養を要求するほど切迫しているとは岡目には見えなかつた。左に右に土蔵附きの持家に住つていた。シカモ余り広くはなかつたが、木口を選んだシツカリした普請で、家財道具も小奇麗に整然と行届いていた。親子三人ぎりの家族で、誰が目にも窮しているどころか、むしろ気楽そうに見える

ていた。が、その頃の——恐らくは今でも——惣ての人の親は、家に資産があると否とを問わず一家の運命希望を我が子の立身出世に繋いでるから、滞りなく無事に学校を卒業してドコへか就職してくれなければ安心もしなかつた。折角卒業の間際まで漕付けながら袴を脱ぐ如く暢気に学校を罷めてしまい、シカモ罷めてしまつて後に何をする見当もなく、何にもしないで懐手をしてブラブラ遊んでいと外思われぬ二葉亭の態度や心持を嫌らなく思うは普通の人の親としての当然の人情であつた。昔の士族氣質から唯一の登龍門と信ずる官吏となるのを嫌つて、碌でもない小説三昧に耽るは昔者の両親の目から見れば苦々しくて黙つていられなかつた。

尤も『浮雲』に由て一躍大家数に入つた二葉亭の成功については老親初め周囲のものは皆驚嘆もし満足もした。丁度ドストエフスキーの『虐げられた人々』中のイユメニエフという老人が青年作家たる若い甥の評判高い処女作を読んで意外な作才に驚くと同一の趣きがあつた。が、文名の齎らし来る収入はとうとういくばくもなかつたので、感嘆も満足もただの一時であつた。加之ならず、二葉亭は一足飛びに大家班に入つたにかかわらず、文学を職業とする気があるかないか解らぬくらいノンキであつて、文名の籍甚に乗じて文壇に躍り出すでもなく、そうかといつて他に相当な生活の道を求める手段を講ずる気振

もなかつたから、一匁いちむすに我が子の出世に希望を繋ぐ親心おやごころからは齒痒はがゆくも思い呆れあきもして不満たらざるを得なかつた。

搗かてて加えて一家の實際の事情は岡目で見るほど決して気楽でなかつた。気楽どころかむしろ逼迫していた。これより二、三年前、二葉亭の先人は官を罷めて聊いささかの恩給に衣食し、二葉亭の毎月の学費も最後の一年は蓄財を割さいて支弁しつゝ万事の希望を二葉亭の卒業後の榮達に期していたのである。であるから二葉亭は卒業するとしないのに論なく、学校を罷めたその日から直ぐ一家を背負つて立たねばならない實際上の責任があつた。二葉亭の日記に由ると、父の恩給高は十一円であつたそうだ。如何に物価の安い四十年前でもまた如何に小人数こにんずでも十一円で一家を維持するといふは容易でなかつたから、岡目から見ると如何に気楽でなかつたのは想像されるので、この窮状を子として拱手こうしゅして知らぬふりする事は出来なかつた。尤も公債もあり蓄財もあり、家屋も自分の所有であつて、正味十一円こつきの身代ではなかつたが、割合に気楽な官吏の生活を送つたものが多年儉約して剩あました蓄財を日に日に減らして行くは、骨を削り肉を刻むに等しい堪えがたい苦痛であるのが当然で、何かにつけて愚痴の出るのも無理ではなかつた。かつあたかも少年時代から友達同士の山田美妙が同じ文壇に立つて名声籍甚し、『以良都女』や『都之花』の主

筆として収入もまた豊かであるのを見ては、二葉亭の生活上の煮え切らない態度が戻かし
くなつて、何かにつけては「山田の武さんを御覽」と云い云いした。

二葉亭がもし「山田の武さん」の真似をするツモリなら、生活問題の如きは造作もなく
解決されたのである。が、二葉亭の文学というは満身に力ちからこぶ瘤おとしようだんを入れて大上段おおじようだんに振
りかぶる真劍勝負であつて、矢声やこえばかりを壮さかんにする小手先こてさき剣術の見せ物試合でなかつた
から、美妙や紅葉と共に轡くつわを駢ならべて小手先こてさきの芸頭を競争するような真似は二葉亭には出
来なかつた。文学の立場は各々めいめい違つてゐるから、一概に美妙や紅葉の取つた道を間違つて
ると軽断するではないが、二葉亭にいわしむれば生活の血にじの滲まぬ製せい作は文学を冒瀆ぼうとく
する罪悪であつたのだ。「あんな器用な真似は出来ない、自分には才がない」と二葉亭は
謙遜していたが、出来る出来ない、才のあるなしよりは自分の信奉するツルゲーネフやド
ストエフスキーやゴンチャロフの態度と違つた行き方をして生活の方便とするを内心窺ひそか
に爪弾つまはじきしてゐた。その頃、二葉亭の交際した或る文人が或る雑誌に頼まれて寄稿した
小説すしやうが頗る意いに満たないツマラヌ作であるを頗しきりに慚愧ざんきしながらも、原稿料を請取ると大
いに満足して直ぐ何処どこへか旅行しようと得意になる心のさもしさを賤かろんじて日記のしに罵つて
いる。自信のない作を与えて報酬を請取るを罪悪の一つとしていた二葉亭は、これではと

ても文学でパンを得る事は覺束おぼつかないと将来ゆくすえを掛念かけねんしたばかりでなく、実は『浮雲』で多少の収入を得たをさえ恥じていた。文壇的野心の鬱勃うよくとしていた当初は左も右かく、自分の文学的才能を危ぶみ出してからは唯一の生活手段とするつもりつもりの文学に全く絶望して、父の渋面、母の愚痴、人生問題の紛糾疑惑、心の隅すみの何処どこかに尚まだ残まってる政治的野心の余燼よじん等の不平やら未練やら慚愧やら悔恨やら疑惑やらが三方四方から押寄せて来て、あたかも稲麻竹葦とうまちいと包围くわいされた中に籠ろうじよう城じようする如ごとくに拔ぬきさし差さならない煩悶はんもん苦吟さいなに苛いらまれていた。

二葉亭の日記の数節を引いて、その当時の煩悶焦慮を二葉亭自身をして語らしめよう。

「白石はくせき先生の『折焚柴おりたくしばの記き』を讀よみて坐そぞるに感あずる所あり、先生が若かりし日、人のさかしらに仕を罷めて浪人の身となりさがりたる時、老いたる父母を養ひかねて心苦しく思ふを人も哀れと見て、あるいは富家の女婿むすめになれと勧められ、あるいは医を学びて生業を求めよといさめらる、並々の人ならましかば、老いたる父母の貧しうくらすを看過みすぎしがたしとて志も挫くじけ氣の衰おとろふるにつけ、我に便べんよき説をも案あじ出して、かかる折なほ独善の道を守らば弥いよいよ々道みちに背そむかんなど自らも思ひ人にもいひて節を折るべきに、さはなくてあくまでも道を守りてその節を渝かへず、父なる人も並々の武士

にはあらで却りてこれを嬉しと思ひたり、アアこの父にしてこの子あり、新井父子の如きは今の世には得がたし、われ顧みてうら恥かしく思ふ。」

「ああ我が気力は衰へたる哉、学校を出でしより以来一日として心の霽る事なければ樂しとおもひたることもなし、今の我が身の上をひしひしと思ひつむる時、生きてかかる憂目見んより死してこの苦を免かる方はるかに勝るべしなど思ひたるは幾度もありたれど、その頃はまだ気力衰へたれど、滅するには到らざりしをもて、筆を執りて文を草することも出来しなり、されどこのごろは筆を執るも慵くてただおもひくづをれてのみくらす、誠にはかなきことにこそあれ。」

「反訳叢書は本月うちに発兌せんといひしを如何にせしやらん、今においてその事なし、この雑誌には余も頼まれて露文を反訳せしにより、その翻譯料をもて本月の費用にあてんと思ひをりしに今は空だのめとなりしか、人事齟齬多し、覚えす一歎を發す。」

「この頃は新聞紙を読み、何某は剛毅なり薄志弱行の徒は慚死すべしなどいふ所に到れば何となく我を誹りたるやうにおもはれて、さまざまに言訳めきたる事を思ふなり、かくまでに零落したる乎。」

当時の二葉亭の煩悶はこの数節に由るも明かであらう。進んで小説家たる覚悟も勇氣もなく、さればとて退いて欲するままに静かに読書研究するをも許されない境涯であった。二葉亭の日記に、「公債を買ひたい買ひたいといふゆる周旋していよいよとなるといやになり、借家を買ひたい買ひたいといふゆる周旋していよいよとなるとこれもまた二の足を踏む人は周旋人が迷惑すとかやいひたり、旨き事をいひたるものなり、」とあるは当時の二葉亭が右すべきや左すべきやと迷った心状を自ら罵った冷嘲である。二葉亭は人のする事が何でも面白くなつて常に氣が變るを到底事を成すに堪えざる性格として同じ日記中に自ら嘆息しているが、こういう性格も多少は手伝つたのであろうが、当時の境遇上処世の方向に迷つたのは無理もなかつた。

その間に試みたのがツルゲーネフの『あいびき』の翻訳であつた。が、この翻訳は前にビエリンスキーを翻訳したと同じく、自ら傾倒するツルゲーネフを紹介して公衆に興味を傾とうとしたので、原稿料を取るためではなかつた。勿論、民友社は報酬を支払つたが、その報酬は何ほどのものでもないから生活を補う資にはならなかつた。

今的女子学院の前身の桜井女学校に聘されて文学を講述したのもこの時代であつた。ツイ先頃欧羅巴から帰朝する早々脳栓塞で急死した著名の英語学者長谷川喜多子女史や

女子学院の学監みたにたみこ三谷民子女史はタシカ当時の聴講生であつたと思う。が、ビエリンスキーやドブロリユーボフを祖述する二葉亭の文学論は当時の女学生の耳には（恐らくは今の女学生にも）余りに高遠深しんすい邃すいであつて、満堂殆んど耳を傾くるものが一人もないのに失望していくばくもなく罷やめた。が、これもまた生活のためではなかつたので、自分の信奉する説を一人にだも多く——うら若い婦人に対してすらも——講演して新らしい思想を鼓吹する機会を得たのを喜んで応じたのであるから、この窮乏の間に処おりながら初めから報酬を辞して受けなかつた。

六 『浮雲』 第三篇及び官報局出仕

『浮雲』 第三篇の発表されたのはこれより少し後であつた。この三篇を書いていた時はあたかも胸中の悶々に堪えなくて努力も功名も消えてしまった真最中まっさいちゆうであつた。日記に、「余は今日に到るまで小説家にて世を送る望みなしといひつつもなほ小説家とならんことをのみつとめり、他より見ればをかしく見ゆべし」とあるは毎月書肆しよしから若干ずつ資給されていた義理合上余儀なくされて洩りがちな筆を呵かしつよんどこつよんどこ擲よんどこるなしに机に向つていた消

息を洩らしたのであろう。

二葉亭は何をするにも真劍勝負であつた。襷鉢巻たすきはちまきに股立ももだち取つて、満身に力ちから瘤こぶを入れつつ起たちあが上あがつて、右からも左からも打込む隙すきがない身構えをしてから、曳えいやツと気合きあいを掛けて打込む命掛けの勝負であつた。追取おつとり刀がたなでオイ来たおつとりと起上る小器用な才に乏しおつとりかつた。「間に合わせ」とか「好い加減」とかいう事が嫌いであつたし、また出来ない人であつた。談話するにさえ一言一句を考え考え腹の底から搾しぼりだ出し、口先きでお上手じょうずや胡麻化しごまかをいう事が決して出来なかつた。それ故、文芸上の興味が冷め、生活上の苦勞に苛さいなまれていても一夜漬いちやづつけの書流かきなしで好い加減けりに覺けりをつけて肩を抜いてしまうという事は出来ないで、イヤイヤながらもやはり同じ苦辛くしんを重ねていた。が、実は最もう小説どころでなかつた。根本の人生の大問題が頭の中で渦うずを巻いていた。身に迫る生活上の苦勞がヒシヒシと押寄せて来た。惰力もだで筆を執つていてもイツマデ経たつても油が乗つて来なかつた。イクラもだ悶あせいても焦あせつても少しも緊張して来なかつた。真劍勝負でなければ何にも出来ない人がどうしても真劍勝負の意気込になれなかつた。

『浮雲』第三篇は作者の日記の端に書留めた腹案に由ると、お勢の墮落と文三の絶望とに終るのだが、発表されたものを見ると、腹案の半ばにも達しないで中途から尻切しりきりとんぼ

に打切られておる。恐らくはマダ発表するを欲しない未定稿であつたらうと思う。尤もこの悶々の場合にこれより以上に玉成ぎよくせいする事はとても出来なかつたらう。かつ、二葉亭の性質として決して好い加減に書擲かきなぐつたものではないだらうが、三方四方の不平不満が一時に殺到する心的葛藤に忙殺されては、虚心坦懐たんかいに沈着おちついて推敲すいこう鍛練たんれんしてられないのが当然であつた。恐らく書肆に対する義理合上ぎりあひあがり抛なるなしに自分でも満足しない未成の原稿をイヤイヤながら引渡したに違ちがひないのは前後の事情から明瞭に推断される。

二葉亭の日記に由ると、第三篇の発表された『都之花』を請取つた時は手がブルブル慄ふるえて、歩きながら読んで行く中うちに忽たちまち顔色かおいろが變つて、「これほど拙つたないとは思わなかつた、印刷して見ると我ながら拙つたなくて読むに堪えない」と、読終つた時は心が早鐘はやがねを突つく如くワクワクして容易に沈着ちんちやくいていられたとある。

なるほど、前にもいつた通り、第三篇は油の十分乗つた第二篇に比べると全部たるとに弛たるみがあつて気が抜けておる。が、同じ時代の他の作家の作と比べて決して見劣りしなかつたが、己れの疵瑕ししかを感じるに余りに鋭敏な作者は、丁度神經過敏家が卵たまごの毛けで突ついたほどの負傷でも血を見ると直ぐ氣絶するようように、自分の作が意いに満みたないと坐いても起たつてもいられたかつたらしい。聡明そうめいに過すぐるものは自信を欠くと昔からいうが、二葉亭の如きはその適

切な一例であつた。自分を局外に置いて見る時は群小作家皆豆粒よりも小さかつたが、自分をその中の一人として比較する時は豆粒よりも小さく思う人よりも更に一層自分が小さく思われて堪えられなかつたようだ。その時の日記にも「今までは某々らの作る小説は拙なくして読むにたへずと思ひつるが、余の作に比ぶれば彼らの作は遙に勝れり、余は元來小説家にも非ず、また小説家とならんとも思はず、」云々とあるように、これより以前から文学に絶望して衣食の道を他に求めるべく考えていたのがこの不快な絶望にいよいよ益々沮喪して断然文学を思切るべく決心した。

だが、世間は作者自身が失望する如くにこの第三篇にも失望しないで、文人は交を求め書肆は原稿を乞うて益々やまなかつたので、文学を思切つた二葉亭はこれらの文人交際や本屋の応接に堪えられなかつた。日記の一節に曰く、「吉岡書店よりまた『新著百種』をおくりこす、こは第三卷なり、かう発刊の都度々々におくりこすは予にも筆を執らせんとの下心あればなるべし、そを知りつつ取り置くは愚なり、辞みやらんとは思へどもさすがに打付けにさいはんも何となく氣の毒にてそのままに打過ごす、余はかほどもで果断なき乎、歎ずべき事の第一なり、」と。また曰く、「書肆某来りて四方山の物語をす、余はかかる射利の徒と交はるだも心苦しけれどもこれも交際と思ひ返してよきほどにあし

らへり、もし心に任せたる世ならましかば彼ら如き輩を謝して明窓淨几の下に静に書を読むべきを、」と。二葉亭が全く文壇から遠ざかろうとして苦悶していたはこれを見ても明かである。

この決心は第三篇の執筆中から萌していた。あくまでも自分の天分を否定し、文学ではとても生活する能力はないものと断念め、生中^{なまなか}天分の乏しいのを知りつつも文学三昧に沈^{ちんめん}湊^{ちゆう}するは文学を冒瀆する罪悪であると思詰め、何とかして他に生活の道を求めて学問才芸を潰^{つぶ}しに投^{なげうり}売^りしても一家の経済を背負つて立とうと覚悟した。が、この覚悟はありながら、一面には極めて狷介で人に下るを好まないと同時に、一面には人に対して頗る臆病であつて、伝^{つて}を求めて権門貴戚^{きせき}に伺候するは魯^{おろ}か、先輩朋友の間をすらも奔走して頼んで廻るような小利口な真似は生^{しょうとく}得^{とく}出来得なかつた。どうかしななければならぬと思いつつもどうにもする事が出来ないで独^{ひと}りで窘^{きんきゆう}窮^{きゆう}煩悶^{はんもん}していた。この苦境を見るに見兼ねて、もし仕官する希望でもあるならと片肌^{かたはだぬ}抜^ぬいでくれたのが語学校の旧師の古川常一郎であつた。二葉亭はこの間の消息を日記に洩らして、官吏は元来心に染まぬが今の場合聊^{いささ}かなりとも俸^{ほう}銭^{せん}を得て一家を支^{ささ}える事が出来るなら幸いであると古川に頼んで、さてそのあとで、「何となくうら恥かしきやうに心落ちあらず。白石先生の事など憶^{おぼ}出^でせば背^{そむ}に

冷汗ひやあせを流す」と書いておる。二葉亭の自卑自屈を余儀なくされる窘窮煩悶の状がこの二、三行の文字に見えるようである。

が、結局古川の斡旋あつせんで、古川部下の翻譯官として官報局に出仕したのが明治二十二年の夏であつて、これから以後の数年は生活の保障に漸く安心して暫らく官途とつかいに韜晦し、文壇からは全く縁を絶つて読書に没頭する事が出来た。

七 官報局及び雌伏時代

露語の両川・高橋時代の官報局・精神心理の研究・罪悪心理と下層研究・最初の家庭生活の失敗・『片恋』・官報局を去る

二葉亭の仕官を説く前に先ずその恩師古川常一郎を語らねばならない。古川は今から十
四、五年前に不遇の中に易簣えきやくしてしまつたが、今でもなお健在であるはずの市川文吉と
聯ならんで露語学界の二大先輩であつた。この両川に二葉亭即ち長谷川を加えて露語の三川と

称されておる。不思議な事には両川とも功名心が薄く、各々数年露国に留学して帰朝した後、しばしば先進の大官から重要な椅子を薦められても決して肯んじないで、一は終生微官に安んじ、一は早くから仕官を辞して、功名榮達を白眼冷笑していた。殊に古川は留学前は大隈侯の書生であつて、義弟西源四郎は伊藤公の知遇を受けて終に公の馬となつた浅からぬ縁故があつたから、もし些かでも野心があつたらドンナ方面にでも活躍出来たのである。が、富貴顯榮を見る土芥に等しく、旧外国語学校廃止後は官報局の一属僚を甘んじて世の榮達を冷笑していた。市川文吉は多少の資産があつたからでもあろうが、早くから官途を退隠して釣道楽に韜晦していた。二葉亭はこの両川の薰陶を受けたが、就中、古川に親近して古川門下の顔淵子路を任じていた。その性格の一部が古川に由て作られたのは争われない。

当時の官報局は頗る異彩があつた。局長が官界の逸民たる高橋健三で、翻訳課長が学界の隱者たる浜田健次郎、その下に古川常一郎、陸実等、いずれも聞ゆる曲者が顔を列べ、而して表玄関の受附には明治の初年に海外旅行免状を二番目に請取つて露国の脳脊髓系を縦断した大旅行家の嵯峨寿安が控えていた。揃いも揃つて氣骨稜々たる不遇の高材逸足の集合であつて、大隈侯等の維新の当時の築地の梁山泊知らず、吏臭紛々た

る明治の官界史にあつては恐らく当時の官報局ぐらい自由の空氣の横流していたはけだし類を絶しているだろう。

高橋健三は官報局の局長室に坐している時でも従五位勲何等の局長閣下でなくて一個の処士しじあん自恃庵主人であつた。浜田は簡樸質素の学究、古川は卓落不羈ふじきの逸民、陸は狷介氣を吐く野客であつた。而して玄関番は高田屋嘉兵衛たかだやかへえ、幸太夫に継いで露国探險者たる一代の奇矯児ききょうじ寿安老人であつた。局長とい課長といは属官といは職員録の紙の上の空名であつて、堂々たる公衙こうがはあたかも自大相下らざる書生放談の下宿屋の如く、局長閣下の左右一人として吏臭あるものはなく、煩瑣はんさなる吏務を執るよりはむしろ詩を品し画を評し道徳を説き政治を談じ、大は世界の形勢より小は折花攀はなりゆう柳の韻事まで高談放論珍説贅ぜ議いぎを闘たたかわずに日も足らずであつた。

二葉亭はこの中に投じた。虚文虚礼便べんねい佞てい諛ゆ諛ゆを賤いやしとして仕官するを欲しなかつた二葉亭もこの意外なる自由の空氣に満足して、局長閣下と盛んに人生問題を論じて大得意であつた。左ひだりに右みぎくこの間は衣食の安定を得たので、思想を追究するあたかも餓うゆるが如き二葉亭は安心して盛んに読書に没頭した。殊にダーウイン、スペンサー等の英国進化論を専ら研究したが、本来ヘーゲルの流れを汲くむ露国の思想に養われていたから、到底これら

の唯物論だけでは満足出来ないで、終にコントに走つて爰に初めて一道の曙光に接する感があった。恐らく二葉亭の思想の根本基礎を作つて終生を支配したのはコントのポジティブイズムであつたらう。

この時代の愛読書であつて、二葉亭の思想を豊かにし根柢を固くしたのはモーズレーの著述であつた。殊にその『Pathology of Mind』は最も熱心に反覆翫味して巨細に研究した。この時分の二葉亭の議論の最後の審判官は何時でもモーズレーであつて、何かにつけてはモーズレーを引合に出した。『浮雲』に二箇処まで見えるサリーやペインも愛読書であつて、サリーの所説はしばしば議論の典拠となつたが、殊に傾倒していたのはモーズレーの研究法であつた。

が、二葉亭は如何なる場合にも批評家であつた。科学を除いては総ての研究は空理であるといつても科学にもまた不満足であつて、科学に偏するスペンサーの哲学の如きも或る程度以上は決して推服していなかつた。かつ常に曰く、「科学となると全然無識だから、勢い兜を脱いで降参しなけりやならぬが、例えば22が4というは欺くべからざる確實の数理であつても、科学者が天体を観測するに方つて毫釐の違算がしばしば何千万億の錯誤を来すと同様に、眼前の研究にもまた同じ誤算がないとは限らない。数その物は確實であ

つても数を算出する運算の方式は必ずしも正しいとは信じられない、」と。この理由からして科学者の説を有力な参考としても或る程度以上はやはり余り信仰しなかった。

「科学者というものは枝ぶりや花ばかりを気にして根を枯らすを忘れる素人植木屋のようなものだ、」といつていた。

呉秀三博士の『精神啓微』や『精神病者の書態』を愛読して、親しく呉博士を訪うて蘊蓄を叩いたのはやはりその頃であった。続いてロンプロゾ一派の著書を搜つて、白痴教育、感化事業、刑事人類学等に興味を持ち、日本の現時の教育家や宗教家がこれらの科学的知識を欠くため渠らの手に成る救済事業が往々無用の徒勞に終るを遺憾とし、自ら感化院を創めて不良少年の陶冶や罪人の矯正をしようという計画を立てた事もあつた。

無論書齋の空想で、実行する意があつたとも思われなかつたが、計画は頗る科学的であつた。当時の二葉亭の説を簡単に搔摘むと、善といひ悪といひは精神の健全不健全の謂で、いわゆる敗徳者、墮落者、悪人、罪人等は皆精神の欠陥を有する病人である、その根本の病因を医さないで訓誡、懲罰、刑辟を加えても何の効があるはずがない。今日の感化院が科学の教養のない道学先生に経営され、今日の監獄が牛頭馬頭に等しい無智なる司獄官に一任される間は百年河清を待つも悪人や罪人の根を絶やす事は決して出来ない。そ

れよりも先ず一種の特殊精神病院を建設していわゆる不良少年や罪人を収容し、最新科学の研究を応用して渠らの感覺欠如や精神欠陥を精査し、根本の病因を究めてこれを医療するのが科学的でもありかつ有効でもある。尤も今日の科学はマダ研究が足りないから、罪人や不良少年に対する根本的精神療法もマダ十分に攻究されていないが、先ず一つの実験所を作るツモリで科学的手段を応用する感化院や監獄を設置し、あたかも病人に対する医者態度で渠らの犯罪や悪癖に対する对症療法を研究するが社会政策上最も急務である。

これまでのいわゆる哲学や宗教や道徳や法律は皆この根本の人間の疾患に立到たちいたらない空理空文である。もしこの精神的欠陥に対する心理療法が完成したなら古今の聖賢の教訓は総て皆廢紙となつてしまふというのがその頃の二葉亭の説であつた。

この説はモーズレーやロンブローから得たので、二葉亭自身の創見ではなかつた。かつ近世心理学の片端かたはしをだも囁かじつてるものなら誰でも心得てる格別目新らしくもない説であるし、今ではこの一派の学説は古臭くなつてる。が、二葉亭は総てこの見地から人を見ていた。例えば下層社会の低劣な品性の如きも教育の不備よりはむしろ精神欠陥に歸し、一時好んで下層社会に出入するやライフの研究者を任ずると共に下層社会に共通する悪俗汚習の病因たる精神欠陥を救うの教師を自任し、細つぶさに下級の生活状態を究めて種々の自己

流の精神医療の方法を案出して試みた。尤もこの試みは大抵失敗して、傍観者からは頗る滑稽こっけいに思われた事もあったが、当人自身は一生懸命で、この失敗を来す所以ゆえんは畢竟ひっきょう科学の素養を欠くから応病与薬の適切な方法を案出する事が出来ないのだと考えて益々研究に深入した。一時はその手段の一つとしての禅の研究を思い付き、『禅門法語集』や『白隠全集』を頻りに精読し、禅宗の雑誌まで購読し、熱心銳意して禅の工風くふうに耽ふけっていた。が、衛養療法や静座法を研究する意つもりで千家せんけの茶事を学ぶに等しい二葉亭の態度では禅に満足出来るはずがないのが当然で、結局禅には全く失望した。禅は思想上のキユーリ才、精神上的の催眠剤であつて、今日の紛糾錯綜入乱れた文化の葛藤を解決せいぎょし制馭せいぎよする威力のないものであるというのが二葉亭の禅に対する断案で、何かの茶ちやばなし咄ついでのついでにい休つきゆうは売僧まいす、白隠は落語家、桃水とうすい和尚はモーズレーの研究資料だと茶かした事があつた。

結局書齋の研究ばかりでは満足出来ないで、学者の畑水はたけすい練れんは何の役にも立たぬからと、実際に人事の紛糾に触れて人生を味あじわおうとし、この好奇心に煽あおられてしばしば社会の暗黒面に入出入した。役所に遠いのを仮托かこつけに、猿楽町ざるがくちようの親の家を離れて四谷よつやの津つの守かみの女の写真屋の二階に下宿した事もあつた。神田の皆川町みながわちようの桶屋おけやの二階に同居した事

もあつた。奇妙な風体をして——例えば洋服の上に羽織を引掛けて肩から瓢箪を提げるといふような変挺な扮装をして田舎の達磨茶屋を遊び廻つたり、印袴纏に弥蔵をきめ込んで職人の仲間へ入つて見たり、そうかと思つと洋服に高帽子で居酒屋に飛込んで見たり、垢染みた綿服の尻からげか何かで立派な料理屋へ澄まして入つて見たり、大袈裟に威張散らして一文も祝儀をやらなかつたり、わざと思切つて吝つたれな真似をした挙句に過分な茶代を気張つて見たり、シンネリムツツリと仏頂面をして置いて急に噪ぎ出して騒いで見たり、故更に桁を外れた馬鹿々々しい種々雑多な真似をして一々その経験を味つて見て、これが人生だよと喜んでいた。

殊にその頃は好んで下層社会に出入し、旅行をする時も立派な旅館よりは商人宿や達磨茶屋に泊つたり、東京にいても居酒屋や屋台店へ飛込んで八さん熊さんと列んで醤油樽に腰を掛けて酒盃の献酬をしたりして、人間の美しくしい天真はお化粧をして綾羅に包まれてる高等社会には決して現われないで、垢面檻褌の下層者にかえつて真のヒューマンチイを見る事が出来るといつていた。この断案の中に真理がない事はないが、この偏寄つた下層興味にしばしば誤まれて、例えば婦人を観察するに方つても、英語の出来るお嬢さんや女学校出の若い奥さんは人形同様で何の役にも立たないと頭から蔑しつけ、

下等女の阿婆摺あばずれを活動力に富んでると感服したり、貧乏人の娘が汚ない扮装なりをして怯おめず臆おそせず平気な顔かほをしているのを虚榮こころに倅とらわれぬ天真爛漫と解釈したり、飛んでもない見当違いあやまちをする事が度々たびたびであった。

同じ見当違いからして罪人や墮落漢や敗徳者に極端に同情し、時としては同情を通り越してやたらと讚美し、あたかも渠らの総てが皆シヨーペンハワーやニーチエのような天才であつて、社会の圧迫に余儀なくされ、あるいは求めて反抗して誤まちまって岐路まじりに奔はしつた氣の毒な犠牲であるように考かんえていた。少くも渠らが世間の道徳とくに背そむいたには疚やましくも恥はかしくもない立派な哲学的根拠こんこがあるように思おもつていた。この考察も万まんざら更見当違いでなく、世には確かに二葉亭の信よんじこずるような拠よんじころない境遇の犠牲となつて墮落した天才や、立派な主張を持つてゐる敗徳者もあるにはあるが、二葉亭は一切の罪人や墮落者の罪惡しを強しいて肯定する氣味合があつた。殊に貧民むきだに対しては異常な同感を払はつて、もし人間から學問技芸等のお化粧むきだを奪むつて裸一貫の露出むきだとしたなら、貧乏人の人格の方が遙はるかに高等社会まじに勝まさつてゐると常にいつていた。この説もまた必ずしも見当違いでなく、無知文盲なる貧民階級まじに往々縉紳しんしん貴族に勝るの立派な人格者を見出す事も稀まれにはあるが二葉亭は強しいてイリユージョンを作つくつて総ての貧民を理想化して見ていた。

この見地からして二葉亭は無知なる腹掛股引はらがけももひきの職人を紳士と見て交際し、白粉おしろいを塗った淪落りんらくの女を貴夫人同様に待遇し、渠らに恩恵を施しつつ道徳を説き、渠らを罪惡の淵ふちから救うて真人たらしむべく種々の手段を講じた。が、実行については全く失敗した。晩年或る時、この時代の誤解や失敗の経験を語つて曰く、「あの時代、むやみと下層社会が恋しかつたのは、やはり露国の小説に誤まれたのだ。スラヴ人は元来空想くわくに耽る国民性だから、無教育者の中にも意外な推理力や想像力を蓄えて人生をフィロソフアイズするものがある。露西亞は階級制度の嚴重な国だから立派な学問権識があつても下層に生れたものは終生下層に沈淪しておらねばならない。その結果が意外な根柢ある革命的煽動せんどうが下層社会に初まつたり、美くしいヒューマニチーが貧民の間に発現されたりする。露国の小説にはこの間の消息がしばしば洩らされて下層社会のために気を吐いている。こういう小説に読耽つたもんだから自然下層社会に興味を持つようになったが、日本の下層社会は根本から駄目だ。精神の欠乏が物質の不足以上だから、何を説いても空々寂々で少しも理解しない。倫理も哲学もあつたもんじやない、根柢からして腐敗し切つていて到底救うべからずだ——」と日本の下級者の無知無恥に愛想を尽かしていた。こういう見当違いをしたのはツマリ理想負けがしたので、二葉亭の面目はこういう失敗にかえつて躍如しておる。

官報局に出仕する間もなく二葉亭は家庭を作つて両親と別居した。初めは仲猿楽町に新居を構えたが、その後真砂町、皆川町、飯田町、東片町としばしば転居した。皆川町から飯田町時代は児供が二人となつた上に細君（先妻）の妹を二人までも引取り、両親にも仕送つていたから、家計は常に不足がちであつた。その上に二葉亭は、ドチラかという浪費家であつて、衣服や道具には無頓着であつたが食物にはかなりな贅沢をした。加之ならず、その頃の先妻は家政を料理する才が欠けていて、二人が二人とも揃つて経済に無茶であつたから、さらぬだに不足がちの家計が一層紊亂して、内証は岡目に解らぬほどの不如意を極めていた。

かつ加うるに夫婦の間が始終折合わないで、沈黙の衝突が度々繰返された。その間の紛糾んだ事情は余り深く立入る必要はないが、左に右く夫妻の身分教養が著るしく懸隔して、互に相理解し相融合するには余りに距離があり過ぎたのが原因であつた。公平に見たなら二葉亭の方が暴君で、細君の方は極めて柔順な奴隷であつたろうが、夫婦の間が暴君と奴隷との関係では互に満足出来るはずがないから、あたかも利刃を揮つて泥土を斬るに等しい何らの手答えのない葛藤を何年か続けた後に、二葉亭は終に力負け根負けがして草臥れてしまった。二葉亭のためにも勿論不幸であつたが、細君の方にも同情すべき気の毒な事

情があつた。とうとう最後が破縁となつて、善後の処分をするために二葉亭は金を作らねばならなくなつた。

その時分、文壇の機運はいよいよ益々爛熟し、紅露は相對墨して互に覇を稱し、鷗外は千朶山房に群賢を集めて獅子吼し、逍遙は門下の才俊を率いて早稲田に威武を張り、樗牛は新たに起つて旗幟を振り、四方の英才俊髦一時に崛起して雄を競うていた。二葉亭は『浮雲』以後全く韜晦してこの文壇の氣運を白眼冷視し、一時莫逆を結んだ逍遙とも音信を絶していたが、丁度その頃より少し以前、逍遙と二葉亭とは偶然私の家で邂逅して久闊を叙し、それから再び往来するようになっていた。その頃『早稲田文學』を根城として専ら新劇の鼓吹に腐心していた逍遙は頻りに二葉亭の再起を促がしつゝあつたが、折も折、時なる哉、二葉亭はこの一家の葛藤の善後処分を逍遙に謀つた結果、終に再び筆を操るべく余儀なくされたのがツルゲーネフの『アーシャ』即ち『片恋』の翻譯であつた。

その時は明治二十九年の十二月、即ち『浮雲』第三篇発表後八年目であつた。世間はあたかも暫らく消息不明であつた遠征將軍が万里の旅から凱旋したのを迎えるように歓呼した。が、二葉亭自身は一時の經濟上の必要のため抛るなく筆を操つたので、再び文壇に歸

るツモリは毫すこしもなかつた。文学に対する態度もまた随したがつて以前とは全く違つて、一生の使命とするというような意気込も理想や抱負も全まるて失なくなつていた。以前は重く感じた責任をも感じなくなつて、「自分は文人でない」と文学とは絶縁した意つもりでいたから、ツルゲーネフを訳したのも唯ほんの一時の融通のための拠たつけないドラツジエリーで、官報局で外字新聞を翻訳した時と同じ心持であつた。尤も二葉亭は外字新聞を翻訳するにもやはり相当な苦辛をした。如何にドラツジエリーのツモリでもツルゲーネフを外字新聞並なみに片附ける事は二葉亭の性しょうぶん分ぶんとして出来得なかつた。が、その心持は以前と違つて遙かに気楽であつた。それゆえ『片恋』一冊いっさくぎりで再び彗すいせい星せいの如く隠れてしまふ意つもりであつたが、財政上の必要が『片恋』一冊の原稿料では充みたすに足りなかつたので、あたかも凱旋將軍を迎える如くに争い集まる書肆しよしの要求を無下むげに斥しりぞける事も出来なかつた。

折しからあたかも官報局長は更任して、卓落不羈ふきなる処士高橋自恃庵は去つて、晨亭門下しゆくそんつうの叔孫通しゆくそんつうたる奥田義人おくだよしんどが代つてその椅子に坐した。奥田は東京市の名市長として最後の光榮を極ひつきに飾つたが、本来官僚の寵ちようじ児じで、礼儀三千威儀三百の官人氣質かたぎの権化ごんげであつたから、豪放酒脱しやだつな官界の逸人高橋自恃庵が作つた放縱自由な空気は忽たちまち一掃され、吏臭紛々たる官場と化してしまつた。陸くがや浜田は早くも去つて古川一人が自恃庵の残墨

に扱よつていたが、区々たる官僚の規矩きくを守るを屑いさぎよくしないスラヴの変形たる老書生が官
人氣質の小叔孫通と容いれるはずがないから、暫らく無言の睨にらみ合いをした後終に引退して
しまった。二葉亭は本来狷けんかい介不羈なる性質として迎合屈從を一要件とする俗吏を甘んじ
ていられないのが当然であつて、八年の長い間を官報局吏として辛抱していたのは、上に
自由なる高橋健三を戴いただいて、恩師古川の下に吏務に服していたからであつた。高橋が去り
古川が罷やめる以上はイツマデ腰弁を甘んずる義理も興味もないので、古川が罷やめると間も
なく自分も辞職してしまつた。二葉亭の一生中、その位置に満足してこつこつ々として職務を
樂たのんでいたは官報局の雌伏時代のみであつた。

八 放浪時代から語学校教授

原稿生活・実業熱・海軍編修・語学校教授

官報局を罷めてから暫らく放浪していた。その間に海軍の編修書記ともなり陸軍の嘱托
教師ともなつたが、ドレもこれも一時の腰掛であつて、初めからその椅子に安んずる意つもりは
少しもなかつたのだ。ツルゲーネフの『ルージン』を初めゴーゴリやガルシンの短篇の翻譯

訳にクツクツとなつて『新小説』や『太陽』や『文芸倶楽部』に寄稿したのはその時代であつた。

が、文壇的活動は元來本志でなく、一時の方便として余儀なくされたのだから、その日を糊口ここうする外には何の野心もなかつた。『浮雲』第三編が発表された『都の花』を請取つた時は手が慄ふるえたというほどの神経質にも似合わず、この時代は文壇的には無関心であつて世間の毀譽褒貶きよほうへんは全く風馬牛ふうばぎゆうであつた。同じ翻訳をするにも『あいびき』や

『めぐりあい』時代と違つて余り原文には拘束きうさくされなくて、自由気儘きままたにグングン訳し、「昔のような糞くそ正直まじな所為まねはしない、拙ますい処ところはドンドン直してやる」と、しばしば豪語していた。が、興に乗じた気焰きえんの飛沫とばしりで豪えらそうな事をいつても、根が細心周密な神経質の二葉亭には勝手に原文を抜かしたり変えたりするような不誠実な所為まねは決して出来ないで、「むやみと訳しなぐるんだ」といいつつも世間の尋常翻訳と比べてはやはり忠実に原文に従つていた。

が、イクラ訳しなぐるツモリでいても、世間の賃ちんやく訳やくをするもののような無責任にはなれないのが二葉亭の性分であつた。例えば『浮草うきくさ』の如き丁度関節炎を憂あしこしいて足腰あしこしが起たたないで臥ねていた最中で、病床びやうじやうに腹はらんばい這はいになつて病苦と闘いながらポツポツ訳し、三

十枚四十枚と訳しおわると直ぐ読返しもしないで金に換えたものであるが、それでも二葉亭の翻訳としてはかなり不手際ふてぎわであつても、英訳本と対照するにやはり擅ほしいままに原文を抜いたり変えたりした箇所は少しもなかつた。イクラ訳しなぐる意つもりでも二葉亭には訳しなぐる事は出来なかつた。

二葉亭が官報局を罷めた直接の原因は局長の更任に続いて恩師古川の理由なき罷免に対する不満であつたが、それ以外に何時いつかは俗吏の圈内を脱して自由の天地に翱こうしょう翔しょうしようとする予かねての志望が幫助てつたつていた。本もと本と二葉亭は軍事であれ外交であれ、左とに右かく何であらうとも東亜の舞台に立つて活動したいのが夙しゆく昔せきの志であつた。軍人たらんと欲して失敗し、外交家たらんと願うてまた蹉躓ささちし、抛なるなしに一時横道に外それて文学三昧に遊んでいたが、夙昔の志望は決して消磨したのではなかつた。官報局に在職中、哲学や精神生理に頻りに興味を持つて研究していたが、東亜の国際関係や産業等の調査はこれのために少しも怠たたらないうで継続していたので、一度は東亜の舞台に躍り出して一と芝居打とうとする念は片時も絶えなかつた。官報局を罷めたのは偶然であるが、退職すると同時にこの野心にわかが俄にわかに活火山の如く燃上つて来た。

然しかるに野心を充たすための計画は浮んで来ても、何をするにも先立つ金を作るは決して

容易でなかった。一家の葛藤を処理するための聊かの金ですらが筆の稼ぎでは手取早く調達しがたいのを染々と感じた渠は、「文学ではとても駄目だ。金儲け、金儲け！」と心の底から叫ぶようになった。加之ならず、語学校時代の友人の多くは実業界に投じ、中には立派に成功して財界の頭株に数えられてるものもあるので、折に触れて渠らと邂逅して渠らの辣手を振う経営ぶりを目のあたりに見る度毎に自分の経済的手腕の実は余り頼りにならないのを内心危なツかしく思いながらも脾肉に堪えられなかった。その度毎に独語して「金儲け、金儲け！」と呟きつつ金儲け専門の実業界に乗出そうとした。

その必要からして、官報局を罷めた後の二葉亭は俄に辺幅を飾るようになった。一体衣服には少しも頓着しない方で、親譲りの古ぼけた銘仙にメレンスの兵児帯で何処へでも押掛けたのが、俄に美服を新調して着飾り出した。「これが資本だ、コンナ服装をしな」と相手になってくれない」と常綺羅で押出し、学校以来疎縁となった同窓の実業家連と盛んに交際し初めて、随分待合入りまでもして渠らと提携する金儲けの機会を覘っていた。が、二葉亭の方は心の底から真剣であっても、対手の方は少しもマジメに請取ってくれなかった。

「右の手に算盤を持って、左の手に剣を把り、背ろの壁に東亜図を掛けて、懐ろには刑

事人類学を入れて置く、これでなければ不可^{いか}ん、」などと頻^{しき}りに空想を談じていた。尤も座興の戯れで、如何に二葉亭が世間に暗くてもこれほど空想的では決してなかった。が、こういう座興の戯れが折角実業界へ飛込もうとするマジメな希望をどれほど妨げたかは解らなかつた。かつまた、これほど空想的でなかつたにしろ、極めて平凡な常識^{いってんぱり}一点張の実業家気質から見れば二葉亭の実業論が非常な空想を加味していたのは争われなかつた。第一、実業家の金儲けは金を儲けるための金儲けであつて、金を以て始まり金を以て終るが、二葉亭の金儲けは何時^{いっつ}でも人道または国家の背景を背負っているのが不用意の座談の中にも現われていたから、実業界に飛込むマジメな志はあつても相手になつて機会を与えてくれるものは一人もなかつた。

加^{しか}之^{のみ}ならず、一方には生活上抛るなしに続々翻訳し、心にもない文学上の談話が度々雑誌に載せられて文名が日に益々高くなるので実業界の友人からはいよいよ文人扱いされ、マジメに実業談を試みても一笑に附されてしまった。「小説なんぞを書いてちゃアとても駄目だ、全^{まる}で相手にしてくれない、」と度々不平を洩^もらしていた。

二葉亭を海軍編修書記に推薦したはやはり旧友の一人たる鈴木某（その頃海軍主計大監^{あつせん}）の幹^{あつせん}旋^{せん}であつた。鈴木は極めて粗放な軍人肌であつて、二葉亭の人物や抱負を理解もし

なければ理解しようとも思わず、ただ二葉亭が浪人しているのを気の毒がって斡旋してくれたので、「丁度君には適當の位置だ。こうして辛抱していれば追々高等官になれる、」と大いに兄貴ぶりを發揮して二葉亭に辛抱を勧告した。

「親切な好い男だが、高等官になれば誰でも満足するものと思つてる、」と二葉亭は苦り切つていた。（鈴木は日露戦争後は海軍を引退して実業界の諸方面に頭を突込んでいたが、位階勲等を持つてる軍人だから、置き物に祭り上げられるだけで一向花々しい成功もしなかつたようだ。今はドウしているかサツパリ消息を聞かない。）

語学校の教授となつたのはそれから間もなく、明治三十二年の九月であつた。高等官の教授を榮としたわけではないが、露語科の主任たる恩師古川の推挙を満足して喜んで就任した。古川はその後いくばくもなく病氣のため辞職したので、二葉亭は代つて主任の椅子に坐した。

教師としての二葉亭は極めて町寧親切であつて、諸生の頭に徹底するまで反覆教授して少しも倦まなかつた。だが、それよりもなおヨリ多く諸生を心服させたのは二葉亭の鼓吹した学風であつた。およそ語学は先ず民族の研究から初めなければならぬ必要と、日露の地理的關係から生ずる露語学者の特殊の使命というような事を語学を教授する傍ら常

に怠たらず力説し、尋常語学の学習以上に露語学者としての特殊の気風を作るに少からず腐心した。同時に露語に交渉する各会社各事業から浦塩ウラジオの商人にまで連絡をつけて卒業生の生活の便宜まで心配した。二葉亭が語学校に在任したのは僅わずかに三年であつたが、その人格はあまねく露語学生を薰化して、先進市川及び古川と聯なんで露語の三川と仰ながれるまで悦服された。日露戦争に参加して拔群の功績を挙げた露語通訳官の多くは二葉亭の薰陶を受けたものであつた。

九 哈爾賓行

二葉亭独特の実業論・女郎屋論・哈爾賓の生活及び奇禍

が、二葉亭は長く語学校の椅子に安んずる事が出来なかつた。本もと本と教職に就いたは恩師の推薦を徳としたためで、教育家を一生の仕事とするツモリはなかつたのだから、暫らくすると一時鎮静した実業熱が再び沸熱して来た。

あたかもその時分、暫らく西比利亞シベリアに滞留していた旧同窓の佐波が浦塩から帰朝してしばしば二葉亭を訪問し、新たに薩哈連サハリから浦塩へ渡航した一人の友人からも度々手紙が来

て、浦塩方面の消息が頻りに耳に入るので、機会を待構えていた実業上の野心は忽ちムクと頭を擡上げて食指俄に動くの感に堪えなかつた。

二葉亭の実業というは単なる金儲け一天張ではなかつた。実業側の友人から余り対手にされなかつたはこれがためであつたが、二葉亭の夙昔の希望からいえば一貫した国際の興味を有する問題であつた。二葉亭にいわせると、日本人が浦塩あたりで盛んに商売するのは、当人自身は金儲けより外考えないでも、これが即ち日本の勢力を扶植する所以であるから、商売の種類は何であろうとも関わぬ、海外の金儲けは即ち国富の膨脹、国権の伸長、国威の宣揚である。極端な例を挙げれば、醜業婦の渡航を国辱である如く騒ぐは短見者流の島国的愛国論であつて、醜業婦の行く処必ず日本の商品を伴い日本の商業を達させ日本の地盤を固めて行く。東露に若干たりとも日本の商業を拵げる事が出来たのは全く醜業婦のお庇である。露国は自国の商工業を保護するために外国貨物に重税を課し、例えば日本の燐寸の如き一本イクラに売らねばならぬほどの準禁止税を賦課している。が、こういう極端な保護政策を取つて外国貨物を塗絶しようとしているが、独り外国醜業婦の移入に限つては殖民政策の必要から非常に歓迎し、上陸後もまた頗る好遇して營業の安全及び利益を隠然保護している。浦塩における日本の商売が盛んに発展しつつあるは畢竟醜

業婦の背後に隠れて活動する結果であるから、この特惠に乗じていよいよ益々多数の醜業婦を輸出するは取も直さず益々日本の商業を振う所以である、というのがその頃しばしば二葉亭に力説された醜業婦論であつた。

二葉亭の醜業婦論は一時交友間に有名であつた。その頃二葉亭の家に出入したものは大抵一度は醜業婦論を聞かされた。二葉亭の説に由ると、日本の醜業婦の勢力は露人を風化して次第に日本雜貨の使用を促がし、例えばかつおぶし鰹節が極めて滋味あり衛養ある食料品として露人の間に珍重されて、近年俄に鰹節の輸出を激増したのは露人が日本の醜業婦に教えられた結果である。かつ日本の醜業婦の露人に落籍されるものが益々多く、中には案外なる上流階級の主婦となるものさえあつて、これがために日本風の生活が露人間に流行し、日本品でなければ上等でないように思うものが段々殖ふえて来た。その結果が日本の商品の販路拡張となり、日露両国民の相互の理解となり、国际上の無言の勢力となるから、もし資本家の保護があれば国际上の最良政策としても浦塩へ行つて女郎屋を初めるといつていた。この女郎屋論は座興の空談でなくして案外マジメな実行的基礎を持つてゐるらしかつたが、余り突とつてい梯だから誰もマジメに聞かなかつた。二葉亭と実業というさえも大抵人の耳には奇怪に響いた。ましてや二葉亭と女郎屋というに到つては小説の趣向を聞くと同じ

興味を以て聞くより外なかつた。

左とに右かく二葉亭の実業というは女郎屋に限らず、総すべて単なる金儲けではなかつた。金に逼迫ひつぱくしていたから金も儲けたかつたろうが、金を儲ける以外に大なる経綸けいりんがあつた。その経綸が実業家の眼から見るといふべくして行ふべからざる空想であつたから、偶々たまたまその方面の有力者に話しても聞棄ききすてにされるばかりで話に乗つてくれなかつた。

然るに浦塩の友なる佐波武雄が浦塩の商人徳永と一緒に帰朝して偶然二葉亭を訪問したのが二葉亭の希望を果す機会となつた。佐波はそれまで二葉亭から度々浦塩渡航の希望を洩洩らされても、文人の性格と商売とは一致しないという理由から不理を説いていたが、どういふキツカケからか三人が相会して一夕の交歓を尽した席上、徳永商店の顧問として二葉亭を聘へいそうという相談が熱した。その頃浦塩で最も盛んに商売していたのは杉浦龍吉で、杉浦が露国における日本の商人を代表していた。徳永は新進であつたが、杉浦と拮抗きつこうして大いに雄飛しようとし、あたかも哈爾賓ハルビンに手を伸ばして新たに支店を開こうとする際であつたから、どういふ方面に二葉亭の力を煩つわす意があつたか知らぬが、哈爾賓の支店に遊び半分来てくれないかといつた。二葉亭は徳永とは初対面であつたが、徳永の人物を臂ひしを把とつて共に語るに足ると思込み、その報酬は漸ようやく東京の一家を支うに過ぎない位であつ

たが、極めて束縛されない寛大な条件を徳として、かね予ての素志を貫徹し、足掛りには持つて来いであると喜んで快諾した。かつあたかも語学校の校長たかくす高楠と衝突して心中不愉快に堪えられなかつた際だつたから、決然語学校の椅子を抛棄ほうきして出掛ける氣になつた。多くの友人の中には折角足場の固くなり掛けた語学校の椅子を棄てるを惜おしんで切に忠告するものもあつた。家族は前途を危ぶんで余り進まなかつた。加之ならず語学校の僚友及び学生は留任を希望して嘆願した。が、二葉亭は宝の山へ入る如き希望を抱いて、三十五年の五月末に断然語学校を辞職すると直ちに東京を出発した。

この西比利亞行については色々な説がある。啻ただに徳永商店の招聘に応じたばかりでなく、別に或筋からの使命を受けていたという説もある。が、恐らくは一個の想像説であろう。二葉亭は早くから國際的興味を有して或る場合には随分熱狂していた。が、秘密の使命を果すに適当な人物では決してなかつた。二葉亭の人物を見立ててそんな使命を托する人もあるまいし、托せられて軽率に応ずる二葉亭でもなかつた。かつもしそんな使命を受けていたなら、二葉亭は最少せうすこし豊かであるべきはずであつたが、哈爾賓到着後は万事が予想と反して思うようにならなかつたのみならず、財政上にもまた頗る窮乏して自分自身はなお更、留守宅への送金もまた予期の如くならざるほど頗る困迫していた。

東京を出発する前、二葉亭は暇いとまご乞こいに来て、「何も特別の用務はないので、ただ来てさえくれば宜よいというのだ。露西亞では官憲の交渉が七面倒臭いから、多分そんな方面にでも向ける意つもりだろう。左とに右かく来いというから行つて見るので、その中うちに面白い仕事が見付かつたらそつちへ行つてしまふのサ、」と無造作にいった。

が、哈爾賓へ行つて何をした？ 縦令聊たといかにもせよ旅費まで出して呼ぶからには必ず何かの思わくが徳永にあつたに違いない。が、二葉亭が着くと間もなく哈爾賓では猛烈な虎疫レラが流行して毎日八百五十人という新患者を生じ、シカモ防疫設備が成つておらんので患者の大部分が斃たおれてしまふという騒ぎであつたから、市民は驚慌して商売は殆ほとんど閉止してしまつた。搗かてて加えてその頃から外国人、殊に日本人に対して厳しく警戒し、動やともすると軍事探偵視して直ぐ逮捕した。或る日本人は馬車の中で寺院の写真を見ていた処を警吏に見咎みとがめられて十日間抑留された。また他の或る日本人は或る工事を請負つて職工を捜すため浦塩哈爾賓間を数度往復したので三カ月の禁錮きんこに処された。日本人という日本人は皆こういう常識では理解されない無法な圧迫を受けたから手も足も出せなくなつた。大いに発展するツモリの徳永商店も手を伸ばすどころか圧迫されて縮少しなければならなくなつた。

搗てて加えて哈爾賓へ着く草々詰らぬ奇禍を買つて拘留された。当時哈爾賓では畜犬箝か口令くわいれいが布かれ、箝口せざる犬は野犬と見做みなされて撲殺された。然るに徳永商店では教頭の飼犬の中の一頭だけ轡くわを施つこして鎖で繋つないだが、残りの何頭かは野犬として解放してしまつた。すると或る日、その中の一頭が巡査に吠付ほえき、追われて元の飼主たる徳永商店に逃込んだのを巡査は追掛けて来て、店から引摺出ひきずりだして店前で撲殺し、かつ徳永を飼主と認定するゆえ即時に始末書を警察へ出せと厳命した。丁度二葉亭は居合わじわしたので不法を詰なめてかかれこれ押問答をすると、無法にも二、三人の巡査が一度に二葉亭に躍おどり薙かつて戸外へ突飛ばし、四の五のいわざず拘引して留置檻かんへ投げ込んでしまつた。徳永店員を初め在留日本人はこの報を得て喫驚びつくりし、重立つものが数人警察署へ出頭して嘆願し、二葉亭が徳永店員でない事を証明したので一時間経たない中に放還され、同時に二葉亭の身分や位置が解つたので、その晩巡査部長がわざわざ来訪して全く部下の一時の誤解であつたら何分穩便にしてくれと平詫ひらあやまりに陳謝して、事件は何でも容易に落着おちしたが、詰らぬ事で飛んだ目に会つた。二葉亭が軍事探偵の嫌疑で二ヶ月か三月も拘禁されたように噂うわさされ、これに關聯して秘密の使命を受けていたかのような想像説まで生じたのは多分この事が訛伝かてんされたのであろう。事實は犬の間違であつたのだ。

こんな咄はなしにもならない馬鹿々々しい目に会って二葉亭は幾分か気を腐らせた。もともと初めから徳永商店に長く粘り着こびいてる心持はなく、徳永を踏ふみ台だいにして他の仕事を見付けつる意つもりでいたのだから、日本人の仕事が一も二もなく抑おさえつけられて手も足も出せない当時の哈爾濱の事情を見ては、この上永く沈着おちつく気になれなくなった。そこで哈爾濱を中心として北滿一帯東蒙古に到るの商工業、物産、貨物の集散、交通輸送の状況等を細つさぶに調査した後、終ついに東清鉄道沿線の南滿各地を視察しつつ大連、旅順から營口えいこうを経て北京ペキンへ行った。

十 北京時代

川島浪速と佐々木照山・提調時代の生活・衝突帰朝

北京へ行った目的は極東の舞台の中心たる北京の政情を視察する傍ら支那を知るための必要上、本場の支那語を勉強するツモリであつたのである。幸い旧語学校の同窓の川島浪速ながその頃警務学堂監督として北京に在任して声望隆々日の出の勢いであつたので、久しぶりで訪問して旧情を煖あたためかたがた志望を打明けて相談したところが、一夕の歓談が忽ち

肝胆相照らして終に川島の配下に学堂の提調に就任する事となった。

川島浪速の名は今では知らないものはない。満洲朝滅亡後北京の舞台を去つて帰朝し、近年浅間の山荘に雌伏して静かに形勢を觀望しているが、川島の名は肅親王しゆくしんのうの姻親として復辟派ふくへきの日本人の巨頭として嶋くづを負うの虎の如くに今でも恐れられておる。旧語学校の支那語科出身で、若い東方策士のグループの一人として二葉亭とは学校時代からの親交であつた。旧語学校廃校後はさらでも需要の少ない支那語科の出身は皆窮乏していたが、殊に川島は『三国志』か『水滸伝すいこでん』からでも抜け出して来たような豪傑肌だつたから他にも容れられず自らも求めようともしないで陋巷ろうこうに窮居し、一時は朝夕にも差支さしつかえて幼き弟妹が餓うえに泣くほどのドン底に落ちた。団匪事件だんびの時、陸軍通訳として招集され、從軍中しばしば清廷の宗室大官と親近する中に計らずも肅親王の知遇を得たのが青雲の機縁となつた。事件落着後清廷が目覚めて改革を行わんとするや、川島は肅親王府に厚聘されて警務学堂を創設し、每期四百名の学生を養うて清国警察を補充し、密ただに学堂教務を統すぶるのみならず学堂出身者の任命の詮衡せんこう及び進退黜陟ちゆつちよく等総てを委任するといふ重い権限で監督に任じた。当時の（あるいは今でも）支那の軍制は極めて不備であつて、各省兵勇はあたかも烏合うごうの無頼漢のようなものだから、組織的に訓練された学堂出身の警吏

は兵勇よりも信頼されて事実上軍務をも帯びていた。随したがつてこれを統率する川島の威権は我が警視總監以上であつて、肅親王を背後の力として声威隆々中外を圧する勢いであつた。

提調というは監督の下に総教習と聯び立つ学堂事務の総轄者であつた。出納庶務から人事の一切を綜すべ、学堂の機密にも参じ外部の交渉にも當つて、あたかも大蔵と内務と外務とを兼掌していたから、任務は頗る重くて極めて困難であつた。二葉亭は生なまなか中文名が高く在留日本人間にも聞えていたので、就任の風説あるや学堂の面々は皆小説家の提調を迎うるを喜ばなかつた。就なかんずく中、総教習稲田穰の如きは当初のつけから不信任を公言して抗議を提出そうとした。然るにいよいよ新任提調として出頭するや、一同は皆瀟しょうしや洒しゃたる風流才人を見るべく想像していたに反して、意外にも状じようぼう貌かいい魁かい偉いなる重厚沈毅ちんぎの二葉亭を迎えて一見忽ち信服してしまつた。

川島の妹婿たる佐々木照山も蒙古から歸りたての蛮骨稜々として北京に傲睨ごうごうしていた大元氣から小説家二葉亭が学堂提調に任ぜられたと聞いて太いた激げつ昂かうし、虎鬚こぜん逆さか立つて川島公館に怒鳴り込んだ。「小説家を提調にしてどうする」と厲れいせい声せい川島に喰かつて蒐かると、「先ま左とも右かくも一度会つて見るサ」といわれて川島の仲介で二葉亭と会見し、鼎座ていざして相語つて忽ち器識の凡ならざるに嘆服し、学堂のための良提調、川島のための好参謀を得

たるを満足し、それから以来は度々往来して互に相披瀝して国事を談ずるを快としたそう
だ。

二葉亭の提調生活は当時私に送った次の手紙に髻髯ほうふつとしておる。

拜啓、今日は支那の十二月二十八日にて学校も冬期休業中ゆゑいたつて閑散なるべき
理窟りくつなれど小生の職務は学堂庶務会計一切の事宜を弁理するにありと支那流にては申
す職掌ゆゑ日曜も祭日も滅茶苦茶に忙がしく、一昨夜なども徹夜していはゆる事宜を
弁理候始末ほとほと閉口致候いたしうちに自ら一種のおもしろみさすがになきにしもあらず、
このおもしろみ読書の面白味にもあらず談理のおもしろみにもあらず一種変挺へんていなお
もしろみに候、小生おも惟ふに学者の樂しむ所は理のおもしろみ、詩人の樂しむ所は情の
おもしろみ、事務家の樂しむ所は action のおもしろみ、事の趣にあらんか、元来当学
堂は表面は清国の一学堂なれど裏面は日本の勢力扶植の一機関たれば自ら志士集合所
の如き趣ありて公使館あたりの純然たる官吏社会より觀みれば頗る危険の分子を含みた
る一団体の如く目さるる傾かたむき有これあり之、ために随分迷惑を感じ候事も有之候へど、そ
こが即ち一種の面白味の存する所にて学堂の仕事常に必しも学堂らしからず、時あり
て梁山泊の豪傑連が額あつを鳩ひそかめて密に勢力拡張策を講ずるなど随分變挺へんてい來な事ありてそ

の都度提調先生ひそ私かに自ら当代の蕭しょう何を以て処おるといふ、こんな学堂が世間にまた
 とあるべくも覚えず候、然れどもおもしろみのある所はまたくるしみの伏在する所に
 てその間一種いふべからざる苦痛も有之、この苦痛最初はいたって軽微なりしも仕事
 に深入すればするほど重かつ大になりゆきて時には殆んど耐へがたき事も有之候、小
 生の力よ能くこの苦痛に克かち四圍の困難を排除する事を得ば他日多少の事功を成就し得
 んも、この苦痛と困難とに打負やければ最早それまでにて滅茶々々に失敗致すべく、さ
 うなつたら己やむを得ず日本へ遁にげ歸りて再び生命を一枝の筆に托せざるを得ざるべき
 も、先づそれまでは死力を尽して奮闘の覚悟に候、北京の町の汚なさお話になつたも
 のにあらず、宮中かわや厠と申候共同便所の如きもの往来の両側に処々散在すれども日本の
 共同便所と同日に談ずべくもなし、ただ大道上に一空地を劃し低き土壁めくを繞らしたる
 のみにて糞くそ壺つぼもなければ小便溜だめもなく皆垂流たれながしなり、然れども警察の取締皆無の
 ため往来の人随所に垂流すが故に往来の少し引込みたる所などには必ず黄なるもの累
 々として堆うずたかく、黄なる水湛たんとして窪くぼみに溜たまりをりて臭気紛々として人に逼せまる、そのく
 せ大通にあつては両側に櫛し比びせる商戸金色燦さん爛らんとして遠目には頗る立派なれど近く
 視みれば皆芝居の書割かきわり然ぜんたる建物にて誠に安やすッぽきものに候、支那は爆ばく竹ちくの国にて

冠婚葬祭何事にもこれを用ゐ、毎夜殆んどパチパチポンの音を聞かざるはなし、日本の花火はこれが進化したるものにはあらざるべきか、その他衣食住において日本に類似せる点多く、さすが昔は東洋文明の卸おろしもと元もとたりし面影どこかに残りをり候——
天晴あつぱれ東洋の舞台の大立物おおだてものを任ずる水滸伝的豪傑が寄つて集つてたか天下を論じ、提調先生こうぜん昂然として自ら蕭何を以て処るといふ得意の壇場が髣髴としてこの文字の表に現われておる。

眞実、提調時代の二葉亭は一生の中最も得意の時であつた。俸祿も厚く、信任も重く、細大の事務ことごと尽く掌裡てのひらに帰して裁断を待ち、監督川島不在の時は処務を代理し、隠然副監督として仰がれていた。然るにこの得意の位置をどうして抛棄かするようになった乎、その原因が判然しないが、左ひだりに右みぎく止むに止まれない或る事情があつて、監督川島及び僚友が頻りに留任を勧告するをも固く謝して、決然辞任して帰朝した。この間の事情は当時の消息を知るもの間にも種々の説があつて判然しないが、仮に川島あるいは僚友との間に多少の面白からぬ衝突があつたとしても、その衝突は決して辞職に値いするほどの大事件ではなかつたらしい。ツマリ二葉亭の持もちまへ前の極端な潔癖からしてそれほどでもない些細ささいな事件に殉じて身を潔くするためらしかつた。二葉亭自身もこの事については余り多く語らな

かった。「腹を立てるほどの事でもなかったので、少と早まり過ぎたのサ、」とばかり軽くいつていた。

間もなく日露の国交が破裂した。北京に在留中から露西亜の暴状を憤つて、同志と共にしばしば公使館に詰掛けて本国政府の断乎たる決心を迫つた事もあり、予てからこの大破裂の生ずべきを待設けて晴れの舞台の一役者たるを希望していたから、この国交断絶に際して早まつて提調を辞して北京を去つたのを内心窃かに残念に思つていたらしかつた。

「こう早く戦争が初まるなら最う少し北京に辛抱しているのだった、」とは開戦当時私に洩らした述懐であつた。

十一 朝日新聞社に入る

北京から帰朝したのは三十六年の七月で、帰ると間もなく脳貧血症に罹つて田端に閑居静養した。三十七年の春、日露戦争が初まると間もなく三月の初め内藤湖南の紹介で大阪朝日新聞社に入社し、東京出張員として東露及び満州に関する調査と、露国新聞の最近情報の翻訳とを担任した。満洲及び北京から帰朝したての意気込みもあり、豊富に資料も蓄

えていたし、この調査には頗る興味を持つて大に満足して職務を服した。

然るに新聞紙の材料は巧遅なるよりは拙速を重んじ、堂々たる大論文よりは新鮮なる零細の記事、深く考慮すべき含蓄ある説明よりは手取早く吞込む事の出来る記実、嚙占めて益々味の出るものよりは舌の先きで嘗めて直ぐ賞翫されるものが読者に受ける。新聞紙の寿命はただ一日であつて、各項記事に対する読者の興味を持つはただ二分間か三分間である。この二分間三分間の興味を持たしめるのが新聞記者の技倆であつて、十日一水を描き五日一石を描く苦辛は新聞記事には無用の徒勞である。この点において何事も深く考え細さに究め右から左から八方から見一分の隙もないまでに作り上げた二葉亭の原稿は新聞材料としては勿体なさ過ぎていた。折角苦辛慘澹して拵え上げた細密なる調査も、故池辺三三山が二葉亭歿後に私に語つた如く参謀本部向き外務省向きであつて新聞紙向きではなかつた。例えば当時『朝日新聞』に連掲された東露及び滿洲輸送力の調査の如きは参謀本部の当局者をさえ驚嘆せしめたほどに周到細密を究めたが、読者には少しも受けないうで誰も振向いても見なかつた。新聞紙は一に読者の興味を標準として材料の価値を定めるゆえ、如何なる貴重の大論文でも読者の大多数が喜ばないものは編輯局もまた冷遇する。折角油汗を流して苦辛した二葉亭の通信がしばしば大阪の本社で冷遇されて往々没書とな

つたのは、二葉亭の身にすれば苦辛を認められない不平は道理であるが、新聞記事としては止むを得なかつたのだ。加うるに東京出張員とはいいなから東京に定住して滅多に大阪へ行かなかつたから、自然大阪本社との意志の疎通を欠き、相互の間に面白からぬ感情の行違いを生じ、或時は断然辞職するとまで憤激した事もあつた。この間に立つて調停するかじとりやく楫取役を勤めたのは池辺三山であつて、三山は力を尽して二葉亭を百方慰撫するに努めた。が、二葉亭が自ら本領を任ずる国際または経済的方面の研究調査にはやはり少しも同感しないで、二葉亭の不平を融和するかたわ旁ら、機会あるごとに力を文学方面に伸ばさしめようと婉曲えんきよくに慫慂しやうようした。二葉亭は厚誼こうぎには感謝したが、同時に頗る慊あきたらなく思つていた。

が、三山の親切に対して強て争う事も出来ずに不愉快な日を暮す間に、大阪の本社とは日に乖離かいりするが東京の編輯局へは度々出入して自然親したしみを増し、折々編輯を助けて意外な新聞記者的技倆を示した事もあつた。ポーツマウスの条約に拳国の不平が沸騰した時に偶然東京朝日の編輯局で書いた「ひとりごと」と題する桂首相かいつちの心理解剖の如きは前人未着手の試みで、頗る読者に受けたもんだ。(この一編は全集第四卷に載つておる。)あるいは前人未着手でないかも知れぬが、これほど巧みにこれほど小気味よ能く窮所うがを穿つたもの

は恐らく先人未言であつたらう。二葉亭の直覺力と洞察力と政治的批評眼とがなければとても書けないものであつた。あるいは不満足なる媾和に憤慨した余りの昂奮で筆が走つたので、平素の冷静な二葉亭ではかえつて書けなかつたかも知れない。こういう方面に専ら力を注いだなら新聞記者としてもまた必ず前人未拓の領土を開き得たらうと、朝日の僚友は皆二葉亭が一度ぎりでこの種の試みやめたのを惜んでいた。が、二葉亭はかえつてこれを恥じて、「あんな軽佻な真似をするんじゃないやなかつたつけ、」と悔いていた。

十二 『其面影』と『平凡』

その中に戦争は熄んだ。読者は最早露西亜や満洲の記事には飽き飽きした。二葉亭の熱心なる東露の産業の調査は益々新聞に向かなくなつた。そこで三山初め有力なる朝日の社員は二葉亭をしていよいよ力を文学方面に伸ばさしめようと百方勸説した。その度毎に苦い顔をされたが、何遍苦い顔をされても少しも尻込しないので口を酸くして諄々と説得するに努めたのは社中の弓削田秋江であつた。秋江は二葉亭の熱心なるアドマヤラーの一人として、朝日の忠実なる社員として、我儘な華族の殿様のお守りをするような氣

になって、気を長くして機嫌を取り取りとうとう退のつびき引ならぬ義理すくめに余儀なくさしたのが明治三十九年の秋から『朝日』に連載した『其面影』そのおもかげであった。続いて翌年の十月は『平凡』を連載して二葉亭の最後の文藻ぶんそうを輝かした。この二篇の著わされたのは全く秋江の熱心なる努力の結果であった。

有ありてい体たいにいうと『其面影』も『平凡』も惰力的労作であった。勿論、何事にも真剣にならずにいられない性質だから、筆を操とれば前後を忘れるほどに熱中した。が、肝腎かんじんの芸術的興味が既とつくの昔に去つていて、気の抜けた酒のような気分になつていたから、苦辛くしんしたのは構造や文章の形式や外殻の修飾であつて、根本の内容を組成する材料の採択、性格の描写、人生の觀照等に到つては『浮雲』以後の進境を見る事が出来なかつた。

殊に『其面影』は二十年ぶりの創作であつたから、あたかも処女作を発表する場合と同じ疑懼ぎくしん心が手伝つて、眼が窪み肉が瘡やせるほど苦辛くしんし、その間は全く訪客を謝絶し、家人が室に入るをすら禁じ、眼が血走り顔色が蒼あおくなるまで全力を傾注し、千鍛万練して日に幾十遍となく書き更あらためた。それ故とかくに毎日の締切時間を遅らしがちなので、編輯局から容子を見届けに度々社員を派したが、苦辛慘憺する現状を見るものは誰でも氣の毒になつて催促し兼ねたそうだ。池辺三山が評して「造物主が天地万物を産出うみだす時の苦み」とい

つたは当時の二葉亭の苦辛を能く語っておる。が、苦辛したのは外形の修辭だけであつて肝腎の心棒が抜けていたから、二葉亭に多くを期待していたものは期待を裏切られて失望した。

『其面影』を発表するに先だちて二葉亭は新作の題名について相談して来た。「ふたはあととか「心くずし」とか「新紋形二つ心」とかいうような人情本臭い題名であつて、シカモこの題名の上に二ツ巴ふたどもえの紋を置くとか、あるいは「破れウイオリノ」という題名として絃いとの切れたウイオリンの画の上に題名を書くというような鼻持ならない黴臭かびくさい案だつたら、即時にドレもこれも都々逸どどいつ文学の語であると遠慮なく貶けなしつけてやった。かれこれ往復二、三回もした、最後に『其面影』でモウ我慢してくれといつて来た。この相談を受けた時、二葉亭の頭の隅すみツコにマダ三馬さんばか春水しゅんすいの血が残つてるんじゃないかと、内心成功を危ぶまずにはいられなかつた。

いよいよ『其面影』が現れて、一回一回と重ねるに従つて益々この懸念が濃くなつた。『其面影』の妙処あじわというは二十年前の『浮雲』で味わされたものよりもヨリ以上何物をも加しかえなかつた。加之かのみならず『浮雲』の若々しさに引換えて極めて老熟して来ただけそれだけ或る一種の臭みを帯びていた。言換えると『浮雲』の描写は直線的に極めて鋭どく、

色彩や情趣に欠けている代りには露西亜の作風の新しい匂いがあった。これに反して『其面影』の描写は婉曲に生なまぬる温く、花やかな情味に富んでる代りに新しい生氣を欠いていた。幸田露伴はかつて『浮雲』を評して地質の断面図を見るようだといったが、『其面影』は断面図の代りに横浜出来の輸出向きの美人面を憶おもひださせた。更に繰返すと『其面影』の面白味は近代人の命の遣取やりとりをする苦くるみの面白味でなくて、渋い意気な俗曲的の面白味であつた。

『平凡』は復活後の二度目の作であるだけ、『其面影』よりは筆が楽に伸んびりしておる。無論『其面影』と同じ洗鍊を経たので、決して等閑なわざりに書きなぐつたのではないが、『其面影』のような細かい斧鑿ふせくの跡が見えないで、自由に伸び伸びした作者の洒落しゃらくな江戸ツ子風の半面が能く現れておる。ツマリ『其面影』の時は「文人でない」といいつつも久しぶりでの試みに自おのずと筆が固くなって、余りに細部の雕琢ちやうたくにコセコセしたのが意外の累わずらいをした。が、『平凡』の時は二度目の経験で筆が練れて来たと同時に「文学はドウでも宜いい」という気になって、技術の慾を離れて自由に思うままを發揮したから、前者に比べると荒削りではあるが活き活きした生氣に富んでおる。文人としての二葉亭の最後を飾るに足る傑作である。

が、いずれも『浮雲』の情力的労作であるは争われなかった。『浮雲』以後の精神的及び物質的苦悶に富んだ二葉亭の半世の生活からは最少し徹底した近代的悲痛が現れなければならぬはずであったが、案に相違して極めて平板な不徹底な家常茶飯的葛藤しか描かれていなかったのは、畢竟作者の根本の芸術的興味が去ってしまったからであろう。

十三 第二期の失意煩悶

朝日社内における葛藤不平・国際的危機・『平凡』前後・實際的抱負

が、それにもかかわらず、世間は盛んに嘖々して歓迎し、『東朝』編輯局は主筆から給仕に到るまでが挙つて感歎した。前には満蒙に関する二葉亭の論策研究を虐待した『大朝』の編輯局が二葉亭の籍が大阪にあるを名として当然大阪の紙上にも載すべきものだとして抗議を持出した。各文学雑誌は争つて文学及び思想に関する論文または談話を請うて載せ、社会の公人としての名は益々文人として輝いた。

二葉亭は益々不平だった。半世の夙志が総て成らずに、望みもしない文人としての名がいよいよ輝くのが如何にも不愉快で堪らなかつた。が、世間は如何に見ようとも、自分

の使命は国際的舞台にあるをあくまでも任じて、少しも志望を曲げずに極東時局に関する内外の著書は得るに随したがつて精読し、内外新聞の外交に関する事項は細つひさに究めて切抜きを保存し、殊に『外交時報』は隅から隅までを反覆細読していた。(二葉亭は『倫敦タイムス』、『ノーウ・オウレーミヤ』、『モスコウ・ウエドモスチ』等の英露及び支那日本の外字新聞数十種に常に眼を晒さららしていた。『外交時報』は第一号から全部を取揃とりそろえて少しも座右から離さなかつた。)

かくの如く全力を傾倒して国際問題を鋭意研究したのは本もと本と青年時代からの夙志であつたが、一時人生問題に没頭して全く忘れていたのが再燃したには自ずから淵源えんげんがあつた。日清戦争の三国干渉の時だつた。或る晩慨然として私に語つた。「日本はこれから先き世界を対手あいてとして戦う覚悟がなけりやアならん。東洋の片隅に小さくなって蹲踞うずくまつてゐるなら知らず、聊いささかでも頭角を出せば直ぐ列強の圧迫を受ける。白人聯合して日本に迫るといふような事が今後ないとは限らん。それも圧迫を受けるだけなら、忍んで小さくなつて辛抱がまん出来ない事もなかるうが、圧迫が進んで侮辱となり侵略となつたらドウする。国際公法だの仲裁条約だのといふはまさかの時には何の役にも立たない空理空文である。歐洲列強間の利害は各々相扞格あいかんかくしていても、根が同文同種同宗教の兄弟国だから、率いざとなれ

ば平時の葛藤を忘れて共通の敵たる異人種異宗教の国に相結んで衝るは当然あり得べき事だ」と、人種競争の避くべからざる所以を歴史的に説いて「この覚悟で国民の決心を固め、将来の国是を定めないと、何十年後に亡国の恨みがないとも限らない、」と反覆痛言した事があつた。二葉亭の青年時代の国際的興味が再び熱沸して来たのはその頃からで、この憂国の至誠から鋭意熱心に東洋問題の解決を研究するので、決して大言壮語を喜ぶ単純な志士気質やあるいは国家を飯の種とする政治家肌からではなかつた。二葉亭の文学方面をのみ知る人は政治を偏重する昔の士族気質から産出した気紛れのように思うが、決してんな浮いた泡のような空想ではなかつたので、牢乎として抜くべからざる多年の根強い根柢があつたのだ。今にして思うと、三十年前に人種競争の止むを得ざる結果から欧亜の大衝突の当然来るべきを切言した二葉亭の巨眼は推服すべきものであつた。

明治四十年の六月、突然急痾きゆうあに犯されて殆んど七十余日間病牀びようじょうの人となつた。それから以後著るしく健康を損じて、平生健啖けんたんであつたのが俄に食欲を減じ、或る時、見舞に行くと、「この頃は朝飯はお廃止だ。一日に一杯ぐらいしか喰わない。夜もおちおち寝られない、」といった。「そりや不可ん。転地したらどうだい、神経衰弱なら転地が一番だ、」というと、「転地なんぞしたつて癒るもんか。社の者も頻りと心配して旅行しろ

というが、海や山よりは町の方が好きだ。なアに、僕の病気は何でもない、小説を書かないでも済むようにさえしてくれたらその瞬間に直ぐ癒つてしまふ、」と喋つて淋しく笑つた。

一体が負け嫌いの病気に勝つ方で、どんなに苦しくても滅多に弱音を吹かなかつた。官報局を罷めてから間もなく、関節炎に罹つて腰が立たなかつた時も元氣は頗る盛んで、談笑自如として少しも平生と変らなかつた。その時から比べると、病気はそれほど重くも見えなかつたが、元氣は全で失くなつて頗る銷沈していた。豈夫かに嫌いな文学を強えられるばかりで病氣になつたとも思わなかつたが、何となく境遇を氣の毒に思つて傷心に堪えなかつた。

『平凡』の予告が現われた時、二葉亭が昔から推奨したゴンチャロフの名作を憶い浮べて題名に興味を持ったので直ぐ手紙を送つた。文句は忘れたが、意味はこうである。――『平凡』という題名が如何にも非凡で面白い、(というのは前にもいつた通り『其面影』の題名に関して往復数回した事があつたからで、) 定めし面白いものであるうと楽しみにしておる、左に右に現に文学を以て生活しつつある以上は仮令素志でなくても文学にもまた十分身を入れてもらいたい、人は必ずしも一方面でなければならぬという理由はないか

ら、文人であつて政治家あるいは実業家を兼ねるのも妙であろう、政治あるいは外交に興味を有するが故に他の長所である文学を廃するというは少しも理由にならない、かついやしくも前途に平生口にする大抱負を有するなら努めて寛闊なる襟度を養わねばならない、例えば西園寺侯の招宴を辞する如きは時の宰相たり侯爵たるが故に謝絶する詩人的狷介を示したもので政治家的または外交家的器度ではない——という、こういう意味の手紙であつた。

無論この手紙を送つたのは二葉亭と議論する意でも何でもなかつた。ただ『平凡』の題名に興味を持つた余りに筆を走らしたので、陶庵侯招宴一条の如きは二葉亭の性質として応じないのは百も二百も承知していて少しも不思議と思つていないから、二葉亭の氣質を能く理解する私が更めて争うような事は決して做ない。無論また数行の手紙で二葉亭を反省させあるいは屈服する事が出来ようとも思つていなかった。

然るにこの位な揶揄弄言は平生面と向つて談笑の間に言合うにかかわらず、この手紙がイライラした神経によつほど触つたものと見えて平時にない怒気紛々たる返事を直ぐ寄越した。曰く、「平凡は平凡也、それを強て非凡とおつしやるなら非凡でもよろし、されど平凡はやはり平凡也、首相の招待に応ぜざりしはいやであつから也、このいやといふ声

は小生の存在を打てば響く声也、小生は是非を知らず、可否を知らず、ただこれが小生の本来の面目なるを知りたる而已のみ、「云々と。それから最後に、「いずれその中に行く」と私が書いたに對して、「謀ぼうめん面は今時機に非あらず、やがて折あるべし、」と結んで、手もなぐ当分面會謝絶を通告して来た。私が二葉亭から請取った何十通の手紙の中でこれほど墨ぼ痕つこり淋漓りんりとした痛快なものはない。青筋出して肝かん癩しゃく起した二葉亭の面貌めんぼうが文面及び筆勢にありあり彷彿して、当時の二葉亭のイライラした極度の興奮が想像された。が、腹の立つたありのままが少しも飾られないで表白されているだけに、二葉亭の面目が歴あり々々と最も能く現われていた。このいやというが二葉亭の存在を打てば響く声であるといったは何よりも能く二葉亭を説明している。

二葉亭の文学嫌いは前にいったように単純な志士気質や政治家肌からではなかつたが、それほどに懊おう惱のうしてジリジリと興奮するまで文学を嫌い抜いていたのは、一つは「このいやという存在の声」が手伝つていたのである。二葉亭は何事についても右といえ左、左といえ右という一種の執拗な反抗癪があつて、終局の歸着点が同一なのが明々白白々に解いつていても先ず反對に立つて見るのが常癪であつた。如何いかなる得意のものでも褒ほめられると苦にがい顔をして、如何なる不得意のものでも貶けなされると一生懸命になつて弁明した。仮

にもしその欲する如くに政治家または実業家として相当の位置を作らしめたなら、その時は恐らく余は政治家に非ず、実業家に非ずといったかも知れない。これが即ち長谷川辰之助はせがわ たつ の すけの存在の声であつたのだ。

尤も文学を嫌つて實際界に志ざしたは強ちこの一癖からばかりでなく、實際方面における抱負も或る人々の思うように万まんざら更詩人的空想から産出したユートピア的あるいは志士氣質の自大放言ではなかつた。ちよつと聞けば馬鹿々々しい浦塩の女郎屋論でも、底を叩くと統計やら報告やら頗る周到細密な数字的基礎があつた。殊に北京から帰朝した後の説には鑿々さくさく傾聴すべき深い根柢があつた。無論實際の舞台に立たせたなら直ぐ持前の詩人的狷介や道学的潔癖が飛出して累をなしたのであろうが、それでももしよいよその方面に驥足を伸ぶる機会が与えられたら、強ち失敗に終るとも定められなかつた、あるいは意外の功を挙げないとも計られなかつた。左ひだりに右みぎ終に一回もこの自信ある手腕を試みる機会を与える事が出来ずにしまつたのは、二葉亭自身の一生の恨事であつたのみならず、二葉亭の知友としてもまた頗る遺憾であつた。

十四 露国の亡命客及びダンチエンコ

その頃波蘭ポーランドの革命黨員ピルスウツキーという男が日本へ逃げて来て二葉亭を訪ねて来た。その外にも二葉亭を頼たよつて来た露国の虚無党亡命客が二、三人あつた。二葉亭は渠かれらのために斡旋あつせんしてあるいは思想上多少の連絡ある人士または政界の名士に紹介したり、あるいは渠らが長崎で発行する露文の機関雑誌を助成したり、渠らの資金を調達するためハワイに布哇の耕地の買手を捜したり、あるいは文芸上の連絡を目的とする日波協会の設立を計画したりして渠らのために種々奔走をした。二葉亭はかつてヘルチエンやビエリンスキーに傾倒して虚無党思想についての多少の興味をも持っていたから、帝国主義を懐抱して日本の膨脹を夢見つつも頭の隅すみの何処どこかで渠らと契合していたかも知れぬが、それ以外に渠らを利用して国際的芝居を一幕出そうとする野心が内々あつたらしい。その頃北京時代の友人阿部精二へ送つた手紙に、「西伯利シベリアより露国革命派続々逃込み、中には東京へ来るものも有これあり之候故、これらを相手に一と仕事と出懸でかけし処、相手がまるでお坊ちやんにて話にならず、たうとう骨折損ほねおりぞんとなりたり、今も革命派の上京する者は必ず来つてあれこれと相談を掛け候へども最早相手にならない事に決し候、渠らは皆空論を以て事を成さんと欲する徒にて口舌以上の活動をせんとしふ意なし、こんな事で何が出来るものかと愛想

をつかしたる次第に候、実は最初は今度こそ一世一代の仕事といふ意気込で取掛けたれども右の次第にてこれもまた駄目となりたり、ああ心中の遺恨誰に向つて訴へん、この上は最早退隱の外なし、小説でも書いて一生を送るべく候、」とあるは多分この間の機微を洩らしたものである。が、露西亜の革命黨員を相棒に何をするつもりであつたらう。二葉亭は明石中佐や花田中佐の日露戦役当時の在外運動を頻りに面白がっていたから、あるいはソナナ計画が心の底に萌していたかも知解らぬが、それよりはソナナ空想を燃やして儘に
ならない鬱憤を晴らしていたのだらう。公平に見て二葉亭が実行力に乏しいのを輕侮した露西亜の亡命客よりも二葉亭自身の方がヨリ一層実行力に乏しかつた。二葉亭では明石中佐や花田中佐の真似はとても出来ないのを自ら知らないほどのウツケではないが、そんな空言を叩いて抛ろなしの文学三昧に送る不愉快さを紛らすための空氣焰を吐いたのであ
らう。

明治四十一年の春、ダンチエンコが来遊した。二葉亭は朝日を代表して東道の主人となつて廻々方々を案内して見せた。ダンチエンコは文人としては第二流であるが、新聞記者としては有繫に露西亜有数の人物だけに興味も識見も頗る広く、日本の文人のような文学一天張の世間見ずではなかつた。随つて思想上に契合するものがあつてもなくても、毎日

々々諸方を案内しつつ互に宏博なる知見を交換したのは、あたかも籠の禽のように意気銷沈していた当時の二葉亭の憂悶不快を紛らす慰藉となつたらしかつた。

ダンチエンコは深く二葉亭に服して頻りに露都への来遊を希望し、かつ池辺三山及び村山龍平に向て露都通信員の派遣を勧告し、その最適任者としての二葉亭の才能人物を

盛んに推奨したので、朝日社長村山も終に動かされてその提案に同意した。耆婆扁鵲の神剤でもとても癒りそうもなかつた二葉亭の数年前から持越しの神経衰弱は露都行という三十年来の希望の満足に拭うが如く忽ち掻消されて、あたかも籠の禽が俄に放されて九天に飛ばんとして羽叩きするような大元氣となつた。その当座はまるで嫁入咄が定つた少女のように浮き浮きと噪いでいた。

十五 露都行及びその最後

露都行の抱負・入露後の消息、発病・帰朝・終焉・葬儀

こう決定してからは一日も早く文学と終始した不愉快な日本の生活から遁れるべく俄に急ぎ立つて、入露の準備をするために殆んど毎日、朝から晩まで朝野の名流を訪うて露国

に關する外交上及び産業貿易上の意見を叩き、碌々家人と語る暇がなかつたほどに奔走した。

いよいよ新橋を出発したのが四十一年の六月十二日であつた。十四日にあたかも露西亜から帰着した後藤男を敦賀に迎え、その翌日は米原まで男爵と同車し、隨行諸員を遠ざけて意見を交換したそうだ。如何なる意見が交換されたかは今なお不明であつて、先年追悼会の席上後藤男自らの口からもその談話の内容を発表する事は出来ぬといわれたが、左に右くこの会見に由て男爵の知遇を得、多年の夙志が男爵の後援で遂げられそうな緒を得たのは明らかであつた。

米原で後藤男の一行と別れて神戸へ行き、神戸から乗船して大連を経て入露の行程に上つた。その途上小村外相の帰朝を大連に、駐日露国大使マレイチの来任を哈爾濱に迎えて各々意見を交換した。これらの会見始末は精しく三山に通信して来たそうだが、また實際上の機微に涉るが故に世間に発表出来ないといふ三山はいつていた。この三山も今では易箘してしまつたが、手紙は多分三山の遺篋の中に残つてるかも知れない。

が、露国へ行つて何をするツモリであつた乎は友人中の誰にも精しく話さなかつたが、左に右く出発に先だつて露国と交渉する名士を歴訪し、更にその途上わざわざ迂回して後

藤や小村やマレウイチと会見した事実から推しても二葉亭の抱負や目的をほぼ想像する事が出来る。出発前数日、文壇の知人が催おした送別会の卓上演説は極めて抽象的であったが抱負の一端が現れておる。その要旨を搔摘むところである。

「自分は平生露西亞の新聞や雑誌を読んで論調を察するに、露西亞人の日本に対する眚の怨は結んでなかなか解けない。時来らば今一と戦争しようという意気込は十分見えている。けだし白人種の異人種を征服するのは征服されるものから見れば領土の篡奪であるが、白人種の立場からいえば、人類の幸福のための未開の土地の開発であつて、露西亞の南下の如きも露西亞人は神の特別なる恩寵を受くるスラヴ人の当然の使命だと思つてもいるし、文明が野蛮に打勝つ自然の大法だとも信じている。それ故に露西亞人の眼から見て野蛮国たる日本に露西亞が負けたのは英人がブアに負けたのと同様、啻に露西亞一国の名誉ばかりじゃない、世界の文明国の前途のための由々しき一大事である。このままにもし済ましたなら、白人の文明はあるいは黄人の蛮力に蹂躪されて終には如何なる惨禍を世界に蒙むらすかも解らん。つまり黄人の勝利は文明の大破壊であるから、このまま指を叩いて引込んでる事は世界の文明のためにならない。勝誇つた日本の羽翼いまだ十分ならざる内に二度と再び起つ事の出来ないまでに挫折いて置かねばならんというのは単に露

西亜一国のためばかりでなくて、世界の文明のため人道のためだというのが露西亜人の腹の底の覚悟である。可也、そっちがその了簡ならこっちもそのツモリで最う一度対手になろうとしたいたい処だが、一度の戦争は東洋問題を解決するため止むを得ないとしても、二度の戦争は残念ながら日本の国力が許さない。日本人としては日本の国力が十分恢復出来るまでは何とかして二度の戦争はあらせたくないというのが当然の願いで、それには露西亜人がまだ知らない日本の文明の真相を理解させて、日本人はブア人のような未開人でないという事を十分会得させるが第一策だと思ふ。無論、そんな姑息の方法では根深い誤解を除く事はとても出来ないかも知れんが、少くも彼我国際間の融和を計るには日本の文明を紹介するが有力なる一手段である。自分が露西亜に行くのは朝日の通信員としてであるが、この機会を与えられたを幸いとして、及ばずながらも尽して見たいと思ふはこの方面の努力で、甚だ不完全であるが聊かの経験ある露西亜語を利用して日露国民相互間の誤解を釈き、再び不祥の戦争がなからしむるようによに最善の努力を尽したいと思ふ。自分の微力を以てしては精衛海を填むる世間の物笑いを免かれんかも知れんが、及ばずながらもこれが自分の抱懐の一つである、一云々。

果して二葉亭のいう如くその頃の日露国民間に暗雲が低迷していたか否かは別であるが、

国家を憂うる赤誠はこの一場の卓上話の端にも十分現われておる。出発前暇乞いに訪ねてくれた時も、露国へ行けば日本に通信する傍ら露国の新聞にも頻々投書して日本の文明及び国情を紹介し、場合に由れば講演をも開く意だから、ついでには材料となるべき書籍を折々廻附してもらいたいといった。私は大いに同感を表して、取敢えず手許に有合わした『開国五十年史』を贈り、註文次第何でも送ると快諾したが、露西亜へ着いてから尚だ一回も註文を受ける間もない中に不起の病に取憑かれてしまった。朝日の通信員としてタイムスのブローウイツやマッケンジーを期すると同時に日本の平和のための福音使ともなろうとしたらしかつたが、その抱負の一端だも実行の緒に就く違がない中に思わぬ病のために帰朝すべく余儀なくされた。

二葉亭は学生時代から呼吸器が弱かった。自分でも要慎して痰は必ず鼻紙へ取って決してやたらと棄てなかつた。殊に露西亜へ出発する前一年間は度々病氣になつて著るしく健康を損じていた。この懸念される容体で寒い露国へ行くのは険呑だから一応は健康診断を受けて見たらと口まで出掛つたが、幸いに何にも故障がなければだが、万一多少の故障があつたからつてこれがために多年の夙望を思留りそうもなし、折角意気の旺盛なる目出たい門出に曇影を与うるでもないと思つて、多少は遠廻しに匂わして見たが、

強ては余りに勧めなかつた。だが、こんなに早く不起の病の牀とこに就こうとも思わなかつた。露都へ着いたのが四十一年の七月十五日であつて、着くと直ぐ、一と月経つか経たない中に神経衰弱に罹つてしまつた。で、かれこれ半年近くも何にも做しないで暮して、どうか癒り掛けた翌あくる四十二年の二月十四日、ウラジーミル太公の葬儀を見送るべく、折からの降りしきる雪の中を行列筋の道端みちばたに立っていると、何しろ露西亜の冬の厳しい寒さの中を降りしきる雪に打たれたのだから、病上りの身の何とて堪えらるべき、忽ち迷眩して雪の上に卒倒した。同伴の日本人の誰彼れは驚いて介抱して直ぐ下宿に連れて戻つたが、これが病みつきとなつて終に再び枕まくらが上らなくなつてしまつた。その果はてがどうとう露人の病院に入院して肺結核という診断を受け、暫らくオデッサあたりに転地するかさなくば断然帰朝した方が上分別じやうぶんべつであると、医師からも朋友からも切に忠告された。

この忠告を受けた時の二葉亭の胸中万ばんこく斛くの遺憾苦悶は想像するに余りがある。折角爰こゝまで踏出しながら、何にもしないで手を空むなしゆうしてオメオメとどうして歸られよう。このまま縦令露西亜の土となろうとも生きて再び日本へは歸られないと駄々だだを捏こねたは決して無理はなかつた。が、このまま滞留すれば病氣は益々重るばかりで、終には取返しが付かなくなるのが看みえ透すいていながら万に一つ帰朝すれば恢かいふく復する望みがないとも限らないの

を打棄うつちやつて置くべきでない、在留日本人の某々等は寄たかつて集たかつて帰朝を勧告した。初めは何といつても首を振きつて諾きかなかつたが、剛情我慢の二葉亭も病には勝てず、散々手て古摺こずらした拳句ゆんじこが抛よんじころなく納得なしたので、病気がやや平らになつたを見計みらつて大阪商船の末永支配人が附添ふきい、四月五日在留日本人の某々らに送られて心淋こしくも露都を出発し、伯林ベルリンを迂廻うかいして倫敦ロンドンに着し、郵船会社の加茂丸に便乗したのが四月九日であつて、末永支配人に船まで送られて、包むに余る万斛の感慨を抱かきつつ心細くも帰朝の途つに就ついた。初めいよいよ帰朝と決するや、西比利亞シベリア線を帰かる乎、あるいは倫敦へ出て海路を取る乎というが友人間の問題となつたそうだ。その結果が短距離の西比利亞線を棄あててわざわざ遠廻りの海路を択えぶに決したのは、寒い西比利亞線を行くよりは船で帰るが海気療法ともなるという意見が勝つたからだそうで、不思議に加茂丸へ移乗した時は担架で運ばれたほどの重態が出帆してから次第に元氣を恢復して来た。末永大阪商船支配人の特別の依頼とていい、朝日の記者、名譽ある文人としての名は事務長を初め船員が皆知しつていたから、船医の外に特に一名の給仕を附添つきそいとして手厚く看護し、この元氣なら滞りなく無事に帰朝出来そうだと一同安心して大いに喜んでいた。然るにポルトセイドに着き、いよいよ熱帯圏に入ると、氣候の激變から病が俄あらた革あらまつて、コロンボへ入港したころは最早たの頼あく少な

なつて来た。

電報は櫛くしの齒を引く如く東京に発せられた。一電は一電よりも急を告げて、帰朝を待侘まちわびる友人知己はその都度々々に胸を躍らした。

五月十日、船は印度洋に入った。世界に著しるき澎湃ほうはいたる怒濤が死ぬに死なれない多感の詩人の熱悶苦吟に和して悲壮なる死のマーチを奏する間に、あたかも夕陽いりひに反映てりかえされて天も水も金こん色じきに彩いろどられた午後五時十五分、船長事務長及び数百の乗客の限りなき哀悼悲痛の中に囿とりま繞かれて眠るが如くに最後の息を引取った。

五月十五日新嘉坡シンガポールに着いた。近藤事務長は土地の有志と計りて、事務長以下十数人、遺骸むじくろを奉じて埠頭ふとうを去る三哩マイルなるパセパンシヤンの丘きゆうてん巔たかねに仮の野辺送りをし、日本の在留僧釈梅仙を請じて懇ねんろに読経供養し、月白く露深き丘の上に遙はるかに印度洋の鞞とうとうたる波濤を聞きつつ薪まきを組上げて茶毘たびに附した。一代の詩人の不幸なる最後にふさわしい極めて悲壮沈痛なる劇的光景であった。空しく壮図を抱いて中途にして幽冥ゆうめいに入る千秋の遺恨は死の瞬間までも悶もたえて死切れなかつたろうが、生なまなか中に小さい文壇の名を歌われて枯木かれきの如く畳の上に朽ち果てるよりは、遠くヒマラヤの雪巔を觀望する丘の上に燃ゆるが如き壮志を包んだ遺骸を赤道直下の熱風に吹かれつつ茶毘に委したは誠に一代のヒーロー

に似合わしい終焉しゆうえんであつた。

遺骨が新橋に帰着したは五月三十日で、越えて三日葬儀は染井墓地そめいの信照庵に営まれた。会葬するもの数百人。権門富貴の最後の儀式を飾る金冠しゆうかん繡服しゆうふくの行列こそ見えなかつたが、皆故人を尊敬し感嘆して心から慟哭どうこくし痛惜する友人門生のみであつた。初夏はつなつの夕ゆ映うばえの照り輝ける中に門生が誠意を籠めて捧ささげた百日紅ひやくじつこう樹下に淋しく立てる墓標は池辺三山の奔放淋漓りんりたる筆蹟にて墨黒々と麗わしく二葉亭四迷之墓と勒ろくせられた。

三山は墓標に揮毫きこうするに方あたつて幾度も筆を措いて躊躇ちゆうちよした。この二葉亭四迷は故人の最も憎める名であつた。この名を墓標に勒するは故人の本意でないかも知れぬので、三山は筆を持つて暫らく沈吟ちんぎんしたが、シカモこの名は日本の文学史に永久に朽ちぎる輝きである。二葉亭は果して自ら任ずる如き実行の経綸家であつた乎否かは永久の謎なぞとしても自ら屑しやせよしとしない文学を以てすらもなおかつかくの如く永久朽ちぎる事業を残したといふは一層故人の材幹と功績の偉なるを伝うるに足るだろう。と、三山は終に意を決して二葉亭四迷と勒した。

以上はただ一生の輪廓を描いたに過ぎないが、人物と思想とは特に剖析細究しないでもほぼ知る事が出来よう。文人としての二葉亭の位置の如何なるやは暫らく世間の判断に任

すとしても明治の文壇に類の少ない飛離れた人物であつたはこの白描のデッサンを見ても
おおよそ推測おしはかられよう。文人乎、非文人乎、英雄乎、俗人乎、二葉亭は終にその全人格
を他ひとにも自分にも明白に示さないで、あたかも彗星の如く不思議の光こうぼう芒を残りつつ、倏しゅつ
忽こつとして去つてしまつた。渠かれは小説家でなかつたかも知れないが、渠れ自身の一生は実
に小説であつた。

(明治四十二年六月記、大正十三年十月補修)

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「二葉亭四迷」

1909（明治42）年8月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二葉亭四迷の一生

内田魯庵

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>